

2013年度 修士論文

アメリカにおけるスタンドアップパドルの
発展と普及に関する研究

A study on the development and promotion of
Stand Up Paddle in the United States

2013年度 早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

トップスポーツマネジメントコース

5013A313-0

河合辰巳

Tatsumi Kawai

研究指導教員： 平田 竹男 教授

目次

第1章	序論	5
第1節	背景	5
第1項	スタンドアップパドルの概要	5
第2項	SUPの始まり	9
第3項	愛好者人口の急増	11
第2節	問題意識	11
第3節	先行研究	12
第4節	研究目的	13
第2章	研究手法	14
第1節	アメリカにおけるSUP	14
第1項	調査項目	14
第2節	日本におけるSUP	16
第1項	調査項目	16
第2項	三重県熊野市における大会開催に関する調査	17
第3節	言葉の定義	19
第3章	結果	20
第1節	アメリカにおけるSUP	20
第1項	世界におけるSUPの歴史調査の結果	20
第2項	世界におけるSUP専門誌の歴史調査の結果	23
第3項	メーカーのモデル数の推移調査の結果	25
第4項	世界で開催されたレース数の調査結果	29
第5項	世界における代表的な大会の調査結果	30
第6項	バトルオブザパドルの調査結果	32
第7項	SUPの競技スタイルの調査結果	33
第8項	インタビュー調査の結果	34
第2節	日本におけるSUP	37
第1項	日本におけるSUPの歴史調査の結果	37
第2項	日本のレース数の調査結果	38
第3項	インタビュー調査の結果	38
第4項	三重県熊野市における大会開催に関する調査結果	41
第4章	考察	52
第1節	SUPの発展と普及についての考察	52
第1項	アメリカにおけるSUPの発展と普及についての考察	52
第2項	日本におけるSUPの発展と普及についての考察	52

第3項	三重県熊野市における大会開催についての考察	53
第1節	三重県熊野市での国際大会開催からさらなる発展に向けて	54
第1項	日本の大会が世界の模範となるために	54
第2項	レースは欧米の文化から世界の文化へ	54
第3項	日本における SUP の発展と普及のために求められること	54
第2節	研究の限界と課題	55
謝辞	57
参考文献	58

図表目次

図 1：フラットウォーターでクルージングを楽しむスタイル.....	5
図 2：波に乗って楽しむスタイル.....	6
図 3：SUP で順位を競うレース.....	6
図 4：SUP で順位を競うレース.....	6
図 5：ヨガを楽しむスタイル.....	7
図 6：釣りを楽しむスタイル.....	7
図 7：どんな所で SUP をしますか？.....	8
図 8：他にどんなスポーツをしていますか？.....	9
図 9：ペルー共和国チャンチャンの漁師.....	9
図 10：イタリア共和国ベネチアのゴンドラ.....	10
図 11：東京都大田区大森の海苔漁師.....	10
図 12：1960 年代のハワイ州オアフ島ワイキキビーチでの SUP の光景.....	11
図 13：障害者が楽しむ例.....	21
図 14：SUP の販売における代表メーカー2 社のモデル数の推移.....	26
図 15：レースボードのモデル数の増加.....	27
図 16：インフレーターボードのモデル数の増加.....	28
図 17：インフレーターボードの図説.....	28
図 18：世界で開催されたレース数と開催国数.....	29
図 19：Battle of the Paddle カリフォルニア 参加者数の推移.....	32
図 20：日本でのレース開催数の推移.....	38
図 21：新鹿海水浴場で良いところは何ですか？.....	49
図 22：新鹿海水浴場で嫌だなと思うところは何ですか？.....	50
図 23：大人になった時、熊野市の新鹿海水浴場がどんな海水浴場になっていたら良い と思いますか？.....	51
表 1：世界における SUP の歴史.....	20
表 2：大学における普及活動の調査.....	22
表 3：大学において SUP のレンタルを行っているアメリカの大学の一例.....	22
表 4：世界における SUP 専門誌の歴史.....	24
表 5：世界における代表的な大会.....	30
表 6：SUP の競技スタイルの調査.....	33
表 7：主なインタビューの内容.....	34
表 8：インタビューの対象者.....	34
表 9：インタビューの分析と発展への要素の抽出.....	35
表 10：インタビューの整理によって抽出された発展への要素.....	36

表 11 : 日本における SUP の歴史.....	37
表 12 : 主なインタビューの内容.....	39
表 13 : インタビューの対象者.....	39
表 14 : インタビューの分析と発展への要素の抽出.....	40
表 15 : インタビューの整理によって抽出された発展への要素.....	41
表 16 : 三重県熊野市にて国際大会開催が決定するまでのプロセス.....	42
表 17 : 主なインタビューの内容.....	43
表 18 : インタビューの対象者.....	43
表 19 : インタビューの分析と発展への要素の抽出.....	44
表 20 : インタビューの整理によって抽出された発展への要素.....	45
表 21 : 主なインタビューの内容.....	46
表 22 : インタビューの対象者.....	46
表 23 : インタビューの分析と発展への要素の抽出.....	47
表 24 : インタビューの整理によって抽出された発展への要素.....	48
表 25 : アンケート調査の概要.....	48

第1章 序論

第1節 背景

第1項 スタンドアップパドルの概要

スタンドアップパドル（以下SUPとする）とは、アメリカでの発展が主体となり2004年頃から世界規模で急激に愛好者人口を増やしてきたスポーツである。このスポーツは大きめの専用ボードの上に立ち、パドルを漕いで進むのであるが、全く初めての女性でも簡単に乗ることが可能である。体幹を強く鍛えることが出来、フィットネス効果も抜群とのことで2004年以降世界的に注目を集めている。日本国内においてサーフィンは愛好者数250万人（JPSA 日本プロサーフィン連盟 2012年発表）、ウインドサーフィンは愛好者数50万人（JPWA 日本プロウインドサーファー協会 2012年発表）、SUPは正確な統計はないが急激に愛好者人口を増やしている。SUPは波や風がなくても楽しむことが可能で、平水面であれば、始めるのにさほど高度な技術を必要とせず、マリンスポーツの中でも最も簡単に楽しむことが可能である。

楽しむスタイルを大きく分けると図1のようにフラットウォーター（静水）でクルージングを楽しむスタイルと、図2のように波がある場所で波に乗って楽しむスタイルと二種類に分けられる。

そして近年は図3、4のように、競技として順位を競うレースがアメリカを中心に普及している。



図1：フラットウォーターでクルージングを楽しむスタイル



図 2 : 波に乗って楽しむスタイル



図 3 : SUP で順位を競うレース



図 4 : SUP で順位を競うレース

また、新たな楽しみ方の一つとして、2008年頃には図5のようにSUPの上で行うヨガが登場した。SUPは水上でボードの上に立つという環境から、ヨガに適しており、日本でも愛好家が増えてきている。

同じく 2008 年頃から図 6 のように SUP をしながら釣りをするスタイルが登場した。SUP をしながら、釣竿を身体に装着することで、トローリングの効果を生み出す事ができる、またポイントへの移動も効率がよく適しており、釣りのための道具としての広がりも見せている。ボード上に箱を設置し、釣りの各種道具を収納する。椅子を設置する例も見受けられる。日本においても湘南では SUP をしながら釣りをを行う姿が頻繁に見られる。

これらのように、SUP はアメリカを中心として多様な楽しみ方が広がっている。



図 5：ヨガを楽しむスタイル



図 6：釣りを楽しむスタイル

また、SUP は海、湖、川などで楽しむことができるが、アメリカの ACA（アメリカンカナヌ一協会）の 2012 年度の調査（図 7）によると、穏やかなフラットウォーターで楽しむ人が最も多い。それに伴い、アメリカにおいてフラットウォーター向けの道具の販売が伸びており、フラットウォーターで行う体験会、大会が増加している。

What venue(s) do you paddle a SUP on?

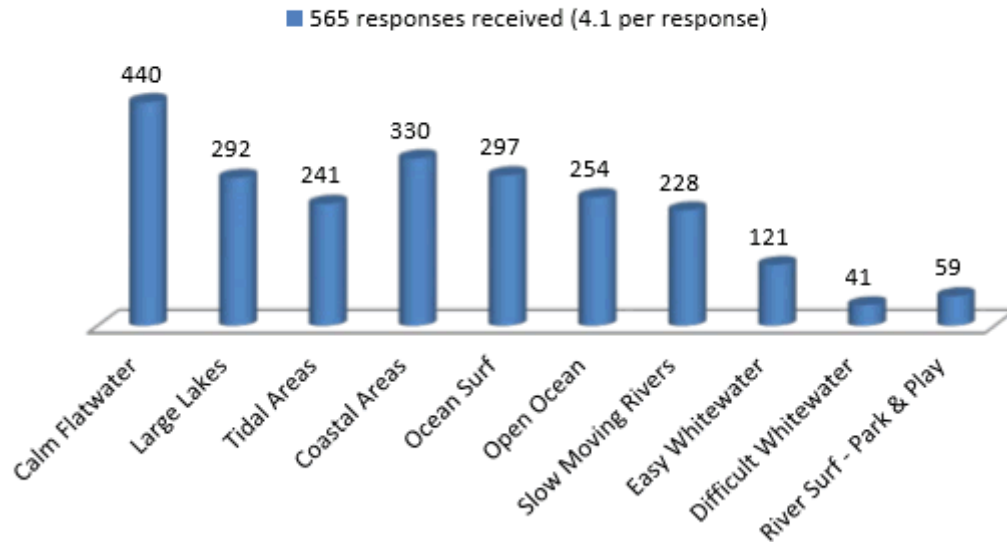


図 7：どんな所で SUP をしますか？

出典：ACA SUP Survey Report 2012 Lifejackets-Leashes-Legislation n=565

<http://www.americancanoe.org>

さらに、SUP はサーフィンを楽しむ人が同時に楽しんでいる場合が多いが、アメリカの SUP MAGAZINE 社の 2011 年の調査（図 8）によると、SUP をしている人は、ジムでのトレーニング、ハイキング、ランニングなどを同時に継続している人が多く、健康に関心の高い人々が SUP を行っている。

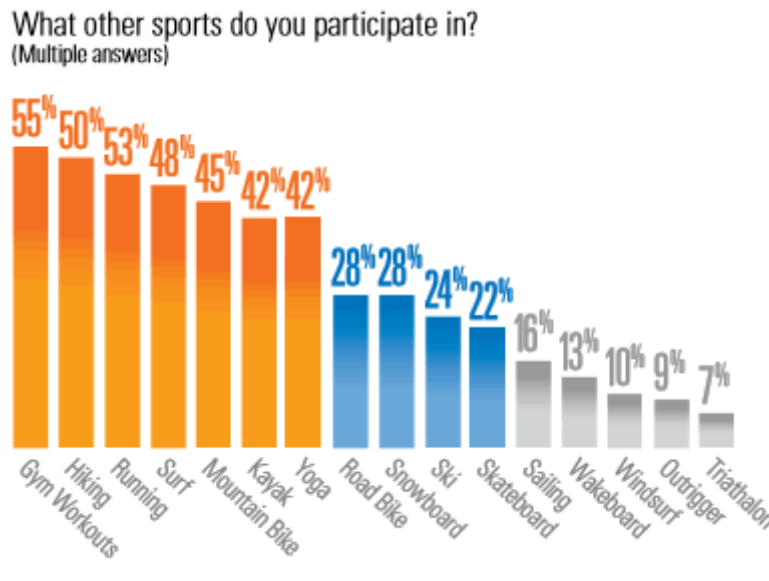


図 8：他にどんなスポーツをしていますか？

出典 SUP MAGAZINE STAND UP PDDLING SURVEY 2011 n=937

<http://www.supthemag.com/>

第2項 SUPの始まり

SUPがいつどこで始まったのか、また起源と推測される行為にはいくつかの説があり解明されていない。そのうちのいくつかの説を下記に挙げる。

かつて南米最大の古代都市として栄えたペルー共和国北西部の太平洋岸に位置するチャンチャンでは、図9のように漁師が葦という、イネ科ヨシ属の多年草によって作られた釣り船の上に立ち、パドルで漕ぎ移動し釣りをした。



図 9：ペルー共和国チャンチャンの漁師を再現した写真

イタリア共和国北東部に位置する都市ベネチアは、運河が縦横に走る水の都である。地上では、道は自動車が入れないほど狭く曲がりくねっており、橋も歩行者専用が多い。そのため17世紀から何世紀もの間市内の輸送の中心となったのは、ゴンドラ（gondola）と呼ばれる伝統的な手漕ぎボートであった。図10のようにボートの上に立ち、長いパドルで漕いで進む。現在では水上バスが輸送の中心を担っているがゴンドラも観光に利用されている。



図 10：イタリア共和国ベネチアのゴンドラ

東京都大田区大森では海苔の養殖が江戸時代初期から始まり、図11のように海苔漁師が船の上に立って船を漕ぎ海苔を収穫した。一時期は、海苔の生産地として栄えたが現在では海苔の養殖は行っておらず、漁師が船の上に立つ姿は見られない。



図 11：東京都大田区大森の海苔漁師

上記の例の他にも世界各地で似たような事例が見られる。しかし現在における SUP に最も近い例は以下に挙げるハワイ州の例であろう。

1960年代ハワイ州オアフ島ワイキキビーチにて、一部のビーチボーイと呼ばれた地元市民が大きめのサーフボードの上に立ちパドルで漕ぎながら観光客のサーフィンする姿を撮

影し観光客に販売した。それが現在のスタイルに最も近いスタンドアップアップパドルの始まりと言われている。ごく少数であるが、それを参考にして一部のサーフィン愛好者が図 12 のように、SUP を楽しんだ。それからしばらくはスポーツや競技として普及する傾向は全く見られず、自然消滅していった。しかし 1960 年代の SUP をよく知るハワイの地元市民が、2003 年にハワイ州オアフ島にて、バッファロークラシックというサーフィンの大会に SUP の部門を設置した。SUP によるウェイブパフォーマンスのクラスであるが、名称を 1960 年代の SUP のルーツにちなんでビーチボーイクラスと名付け、大会が初めて開催された。



図 12 : 1960 年代のハワイ州オアフ島ワイキキビーチでの SUP の光景

第 3 項 愛好者人口の急増

アメリカにおける SUP の愛好者の人口は、アメリカの SUP 専門誌である STANDUP JOURNAL 誌の調査によると、2013 年 8 月の時点で 136 万人に達した。2004 年頃から急激に愛好者人口が増え、10 年ほどで 136 万人を超えるという愛好者の人口推移は、非常に順調であり、将来の更なる発展と普及が期待される。

第 2 節 問題意識

筆者は 20 年以上マリンスポーツ (SUP・サーフィン・ウインドサーフィンなどのスポーツをここではマリンスポーツと称する。) に選手として関わってきた。またマリンスポーツビジネスの経営者としても深く関わっている。マリンスポーツ全体では非常に多くの愛好者がいるにもかかわらず、プロツアーの賞金が低い、選手育成という概念が弱い、日本にお

いて国際的な大会が少なくテレビ中継がほとんどされないという問題がある。これらの問題に、筆者は非常に強い危機感を抱いてきた。そこで筆者はマリンスポーツの中でも最も簡単に楽しむことができる SUP をマリンスポーツの入口として体験してもらい、その後に他の各種マリンスポーツを同時に楽しんでほしいと考える。この方法が最も簡単にマリンスポーツに触れることができ、多くの人々に海を通じて幸せになってもらう最善の方法と考えるからである。

筆者は SUP のレースが盛んなアメリカ・とオーストラリアとハワイに 2010 年より頻繁に遠征をし、競技に参戦しつつ、発展と普及の状況も観察してきた。また現地の大会主催者、選手、スポンサー企業との良好な関係作りに努めてきた。この地域の現在における SUP のレースの発展と普及には目を見張るものがある。日本においても大会の参加者は増え続けているが、現在日本では世界トップクラスの選手が集まる国際大会はない。国際大会の開催は競技の発展と普及には欠かせないと考えている。

以上の考えを持ちながら、世界における SUP の歴史を見てきた筆者は、なぜアメリカにおけるスタンドアップパドルは急激に普及を遂げたのか、どうしたら日本において SUP を普及させることができるのかという問題意識を抱えてきた。

第 3 節 先行研究

このような背景を踏まえた上で、日本における SUP のさらなる発展と普及を促進させていくためには、世界における SUP の発展と普及の中心であるアメリカについての学術的な研究の必要性が痛感された。歴史が浅いため SUP 関連で論文として発表されている先行研究は見当たらないが、日本においては宮村、星川（2010）らが「健康増進」「地域貢献」などを目的として SUP における運動強度の定量化の試みなどの研究¹⁾を続けている。

アメリカにおいては、Rutgers, The State University of New Jersey（ニュージャージー州立大学ラトガーズ校）で Shannon MacDowell 氏による SUP を継続した場合に起きる身体の生理学的変化を理解しようとする研究プロジェクトが BTS バイオ（株）、マンハッタンカヤック社のサポートを受けて 2013 年初頭から行われている。

オーストラリアにおいては、Bond University の理学博士課程 主任研究員の Ben Schram 氏が SUP の世界チャンピオン 2 名と協力し、同じく SUP を継続した場合に起きる身体の生理学的変化と、エリートレベルの競技にて成功するために必要な生理学的要素を研究している。

SUP ではない他のマイナースポーツの発展と普及に関する研究は多く行われてきた。その一例を挙げると、石井（2008）²⁾は、ビーチスポーツの定着に関して優良なサーフィンプログラムを導入することが重要であると主張している。

さらに、鷲見（2008）³⁾は、日本においてはマイナースポーツであるオープンウォータースイミング(OWS)をトライアスロンとの比較により問題点を見つけ出し、振興策を提言して

いる。また、佐藤（2011）⁴⁾は、パラリンピック選手の視点から諸外国の取り組み事例を深く検証し、発展策を導いている。以上のように他のマイナースポーツの発展と普及について述べた研究は多く存在し、SUPにおいては新興のマイナースポーツであるため完成された論文は見受けられないものの、身体の生理学的変化を研究するなどの先行研究は国内外ともに存在する。さらに、宮村、星川（2010）らは生理学的変化の研究以外にも2011年から静岡県浜名湖にてSUPのレースを開催している。本研究の独創性は、SUPという新興のマリンスポーツのアメリカにおける発展と普及に着目し、国内では三重県の熊野市にてSUPのレース開催決定までのケーススタディを研究している点にあると考える。

第4節 研究目的

アメリカにおいて、SUP愛好者が急激に増加している要因を解明し、日本におけるSUPの発展と普及に向けた施策を明らかにする。

本研究では、SUPの発祥の地であり最も普及しているアメリカと、これから更なる発展と普及を目指す日本を研究対象とする。そして2014年10月にSUPの国際大会開催が決定した三重県熊野市を調査対象として選定する。これは、三重県熊野市にて町興しと同時にSUPの普及活動を行い、地域から始まる小さな大会が歴史ある大規模な国際大会へと成長していく際の課題と成功要因を明らかにするためである。

そして筆者は三重県熊野市市役所と協力し、2014年に三重県熊野市においてSUPの国際大会を開催することが決定しており、大会を成功させ継続することを重要な目標としている。熊野市には世界遺産である熊野古道があり世界の観光客を誘致しやすい、そしてツールド熊野という自転車レースの世界大会を開催しておりスポーツの大会を開催することによる町興しに注力している。本研究はその大会の成功と継続のために、また日本におけるSUPの発展と普及に何が必要であるかを検証し、問題集点を科学的分析に基づいてあきらかにし、施策を明らかにすることを目的とするものである。

第2章 研究手法

第1節 アメリカにおける SUP

第1項 調査項目

1) 世界における SUP の歴史調査

(1) 対象

アメリカを中心とした世界における SUP が現在のレベルまで発展する際に直面した壁と、乗り越えるために行った動き。。

(2) 方法

文献調査により行う、文献は STANDUP JOURNAL 誌、STANDUP PADDLE MAGAZINE 誌、インターネットを使用した。

(3) 分析方法

対象を整理し、検証した。そして、それぞれの壁について、SUP に関わる人々がどのような動きを行い、壁を乗り越えたのか整理し、時系列で表した。

2) 世界における SUP 専門誌の歴史調査

(1) 対象

世界で発行されている SUP 専門誌の数。

(2) 方法

文献調査はインターネットを使用した。

(3) 分析方法

何という専門誌がいつどこで創刊したかを時系列で表した。

3) メーカーのモデル数の推移調査

(1) 対象

SUP の大手メーカー 2 社が発売したモデルの数。

(2) 方法

大手メーカー 2 社のウェブサイトから集計して調査した。

(3) 分析方法

年度毎に発売モデル数を調査してグラフにした。

4) 世界で開催されたレース数の調査

(1) 対象

世界中で開催された SUP のレース数。

(2) 方法

インターネットによる調査で集計し、主に SUPracer のホームページより集計した。ただし、あまりに規模の小さい大会は含まなかった。

(3) 分析方法

年度毎に世界で開催されたレース数を調査してグラフにした。

5) 世界における代表的な大会の調査

(1) 対象

世界で開催された代表的な大会の種類と数。

(2) 方法

文献調査により行う、文献は STANDUP JOURNAL 誌、STANDUPPADDLE MAGAZINE 誌、インターネットを使用した。

(3) 分析方法

いつどこで開催されたかを時系列で表した。

6) バトルオブザパドルの調査

(1) 対象

バトルオブザパドルの年度毎の各クラス参加者数。

(2) 方法

バトルオブザパドルの公式ウェブサイトから集計する。

(3) 分析方法

年度毎の各クラスの参加者数を調査してグラフにした。

7) SUP の競技スタイルの調査

(1) 対象

SUP の競技スタイル。

(2) 方法

文献調査により行う、文献は STANDUP JOURNAL 誌、STANDUPPADDLE MAGAZINE 誌、インターネットを使用した。

(3) 各競技ごとに、競技の方法、開催場所を調査しまとめた。

8) インタビュー調査対象

(1) 対象

カリフォルニアで 50 年以上の歴史を持つサーフボードメーカーであるインフィニティサーフボードのオーナーである Steve Boehne 氏、大手サーフブランドの元マーケティング・ディレクターであり、2010 年より国際サーフィン連盟 (ISA) のコンサルタントを務めており、更に 2008 年以来パドルオブザパドルのイベントディレクターを務めてきたカリフォルニアの Barrett Tester 氏、サーフィンのワールドツアー参戦を経て、2010 年にスタンドアップワールドツアーが始まった年から 2013 年まで参戦しており、上位入賞の常連選手であるハワイの Robin Johnston 氏等、外国人 8 名を取り上げた。

(2) 方法

対象者のほとんどが筆者の経営する会社の取引先であり、長期にわたって親交を深めてきた。したがって 2010 年から 2013 年まで何度も現地で会い、メールでのやりとりも複数回に及んだ。

(3) 分析方法

3つのインタビュー項目による対象者と研究者 1対1の半構造的インタビューを行った。回答から、インタビューの会話のうち発展に関する内容が含まれている部分をコードとして抜き出して、そのコードから発展に関する要素を抽出した。

第 2 節 日本における SUP

第 1 項 調査項目

1) 日本における SUP の歴史

(1) 対象

日本における SUP が現在のレベルまで発展する際に直面した壁と、乗り越えるために行った動き。

(2) 方法

文献調査により行う、文献は STANDUP JOURNAL 誌、STANDUPPADDLE MAGAZINE 誌、インターネットを使用した。

(3) 分析方法

対象を整理し、検証した。そして、それぞれの壁について、SUPに関わる人々がどのような動きを行い、壁を乗り越えたのか整理し、時系列で表した。

2) 日本のレース数の調査

(1) 対象

日本で開催された SUP のレースの数。

(2) 方法

インターネットを使用した。

(3) 分析方法

年度毎に日本で開催されたレース数を調査してグラフにした。

3) インタビュー調査

(1) 対象

インタビューの対象としては、ボード卸売業者オーナーとトッププロ選手等、5名に対して行った。インタビューに応じた5名は、様々な理由から氏名を公表しないという同意の下でインタビュー調査を行ったため、本論文では仮称のイニシャルとした。

(2) 方法

対象者のほとんどが筆者の経営する会社の取引先であり、長期にわたって親交を深めてきた。したがって何度も会い、電話やメールでのやりとりも複数回に及んだ。

(3) 分析方法

3つのインタビュー項目による対象者と研究者1対1の半構造的インタビューを行った。回答から、インタビューの会話のうち発展に関する内容が含まれている部分をコードとして抜き出して、そのコードから発展に関する要素を抽出した。

第2項 三重県熊野市における大会開催に関する調査

1) ケーススタディ

ここでは三重県熊野市において2014年度のSUP国際大会開催が決定するまでのプロセスと、それぞれの出来事について、関係者がいつどのような動きを行ったのかを整理し示した。

(1) 対象

三重県熊野市役所市長であり SUP を活用した町興しを実行されている河上敢二氏、三重県熊野市観光スポーツ交流課スポーツ交流係であり、SUP を活用した町興しの最前線で現場を動かす北裏和樹氏を取り上げた。

(2) 方法

三重県熊野市の関係者とは共同で SUP の体験会を開催したため、確認事項が多くメールと電話でのやりとりも複数回に及んだ。

(3) 分析

実際に起きたアクションを時系列で表にして分析した。

2) インタビュー

(1) 対象

インタビューの対象としては、三重県熊野市役所市長であり SUP を活用した町興しを実行されている河上敢二氏、三重県熊野市観光スポーツ交流課スポーツ交流係であり、SUP を活用した町興しの最前線で現場を動かす北裏和樹氏、筆者が 2013 年 6 月 22 日に開催した SUP の体験会の参加者等、7 名を取り上げた。

(2) 方法

三重県熊野市の関係者とは共同で SUP の体験会を開催したため、確認事項が多くメールと電話でのやりとりも複数回に及んだ。

(3) 分析

3つのインタビュー項目による対象者と研究者1対1の半構造的インタビューを行った。回答から、インタビューの会話のうち発展に関する内容が含まれている部分をコードとして抜き出して、そのコードから発展に関する要素を抽出した。

3) アンケート調査

(1) 対象 新鹿小学校の 4 年生から 6 年生の生徒 20 名

(2) 方法 集合調査法

(3) 分析 調査結果をグラフにしてマリンスポーツに対する関心度と開催地である新鹿海水浴場についての意識を明らかにした。

第3節 言葉の定義

言葉の定義について、スタンドアップパドルの事を「SUP」と表現する。本稿では言葉の違いによる解釈の違いが生じない様に「SUP」で統一した。ただし、インタビューや参考文献において使用された表記は、インタビュー対象者の言葉、引用元の表記をそのまま記載した。

第3章 結果

第1節 アメリカにおける SUP

第1項 世界における SUP の歴史調査の結果

表1では、世界における SUP の歴史をまとめた。多くのアクションが起きているが、そのほとんどはアメリカ発のアクションとなっており、アメリカが主体となって発展したことが確認できた。

表 1：世界における SUP の歴史

1960年代	<ul style="list-style-type: none">・ハワイ州オアフ島ワイキキビーチにて、SUP が始まった。
2003年	<ul style="list-style-type: none">・ハワイ州オアフ島にてバッファロークラシックでビーチボーイクラスという SUP によるウェイブパフォーマンスの大会が初めて開催された。
2004年 ～ 2006年	<ul style="list-style-type: none">・ハワイでのバッファロークラシックでビーチボーイクラスが継続して開催され、年を重ねるごとに世界のトップクラスのサーフィン選手、カヌー選手、ウインドサーフィン選手、カイトボーディング選手の参加が見られるようになった。彼らは全員自身の得意分野のスポーツを継続しながら競技に参戦した。
2007年	<ul style="list-style-type: none">・オーストラリアヌーササーフフェスティバルにて第一回 SUP クラス開催した。ウェイブパフォーマンス競技であった。
2008年	<ul style="list-style-type: none">・レースで使用するボードの全長を 12' 6' ' 以下とした規定を用いて、第一回バトルオブザパドルがカリフォルニアにて開催された。・SUP のレースが急激に増えていった・3月21日に世界で初めての SUP の専門誌である STANDUP JOURNAL がアメリカにて創刊した。
2009年	<ul style="list-style-type: none">・SUP 専門誌である STANDUP PADDLE MAGAZINE がアメリカにて創刊した。
2010年	<ul style="list-style-type: none">・SUP で初のウェイブパフォーマンス競技の世界選手権である SUP WORLDTOUR が始まった。世界のトップクラスのサーフィン選手、ウインドサーフィン選手、カイトボーディング選手の参加が世界各地から参加した。彼らは全員自身の得意分野のスポーツを継続しながら競技に参戦した。・WPA (WORLD PADDLE ASSOCIATION) が発足し、SUP の競技における世界標準を事実上提供し始めた。この協会は SUP の競技のルールやガイドラインを定める必要性から、創業者 Byron Kurt によって設立された。

2011 年	<ul style="list-style-type: none"> ・ハワイ州オアフ島にて第一回バトルオブザパドルが開催された。 ・カリフォルニア大学群全 10 校においてレクリエーションスポーツとして SUP の貸出が続々と始まった。(表 2) ・全米の大学においてレクリエーションスポーツとして SUP の貸出が続々と始まった。(表 3)
2012 年	<ul style="list-style-type: none"> ・ SUP WORLDSERIES が始まった。 ・ ISA 世界選手権が始まった。 ・ BIC ワンデザイン世界選手権が始まった。 ・ サンクレメンテオーシャンフェスティバルでは SUP のウェイブパフォーマンス競技がなくなり、代わりに SUP のレースが開催されるなど SUP のレースが急激に増えていった。
2013 年	<ul style="list-style-type: none"> ・ ブラジルにてバトルオブザパドルが始まった。 ・ 8 月にアメリカにて SUP の愛好者の人口が 136 万人に達した。(STANDUP JOURNAL 誌の調査) ・ バトルオブザパドルを主催するレインボーサンダル社が United States Ant - Doping Agency (USADA) と契約を締結し、大会においてドーピング検査の実施を開始した。 ・ 2013 年のバトルオブザパドルに足に障害を持つ選手が初めて参加した。カリフォルニアのオーシャンサイド在住で 47 才のチャールズウェブ選手である。彼は 1986 年にオートバイ事故の後遺症で足の自由を失った。車椅子を固定できる特注のボードで参加した。(図 13)



図 13 : 障害者が楽しむ例

表 2 : 大学における普及活動の調査

貸し出し状況 ○ 行っている × 行っていない

University of California, Berkeley	○
University of California, Los Angeles	○
University of California, Santa Barbara	○
University of California, San Diego	○
University of California, San Francisco	○
University of California, Irvine	○
University of California, Riverside	×
University of California, Davis	×
University of California, Merced	×
University of California, Santa Cruz	×

調査結果は 2013 年 12 月 20 日時点のインターネット調査結果である。

表 3 : 大学において SUP のレンタルを行っているアメリカの大学の一例

レークレーションの一環として、SUP のレンタルを行っているアメリカの大学の一例
California State University
Humboldt State University
Florida State University, FSU
NorthWestern University
Louisiana State University
Wright State University
Weber State University
University of Hawai'i at Mānoa
University of Richmond
Bemidji State University
University of Wisconsin
University of Utah
University of Oregon
Michigan State University
Virginia Commonwealth University
LOYOLA UNIVERSITY CHICAGO
Texas State University-San Marcos

Ohio State University
University of Minnesota Duluth
University of Minnesota Gorge
Brigham Young University-Idaho
University of Maryland
Binghamton University, State University of New York
University of Massachusetts Boston
University of Otago
University of Denver
Central Washington University
St. Cloud State University
Colgate University
University of Houston
University of Akron
University of South Carolina

調査結果は2013年12月20日時点のものであり、2011年時点でアメリカには、4,599校の大学があり（認定制度による認定を受けていない大学も含む）全ての大学を調査するには至らず、グーグル検索による10ページ終了分までとした。

第2項 世界におけるSUP専門誌の歴史調査の結果

表4では、世界におけるSUPの専門誌の歴史をまとめた。全世界で10種類以上のSUP専門誌が発行されているが、そのうちの4種類がアメリカにて発行されており、発展はアメリカが主体であることが確認できた。

表 4：世界における SUP 専門誌の歴史

名称	創刊年度	発行地域
STANDUP JOURNAL	2008 年 3 月 21 日	アメリカ
STANDUPPADDLE MAGAZINE	2009 年	アメリカ
STANDUPPADDLE WORLD MAGAZINE	2010 年	フランス
SUP WORLD	2010 年	オーストラリア
Get up	2010 年	フランス
STAND UP PADDLE MAG	2011 年	オーストラリア
SUP TIME	2011 年	イタリア
SUP MAGAZINE	2012 年 4 月	アメリカ
RACE GUIDE (STANDUPPADDLE MAGAZINE 誌のレース専門誌)	2012 年 10 月	アメリカ
Stand Up Paddle magazine	2013 年 4 月	フランス

第3項 メーカーのモデル数の推移調査の結果

SUPは使用するコンディションと用途によって多くのモデルが販売されている。レース用ボードは全長により競技のクラスが分かれているため、それに応じて多種多様なサイズとデザインのボードが販売されている。ウェイブパフォーマンス用のボードも使用者の技術レベルや使用するコンディションに応じて多種多様なサイズとデザインのボードが販売されている。一般的に上級者ほど波の上での小さく鋭いターンを好むためウェイブパフォーマンス用のボードのサイズは小さいものを好む。反対に初級者ほどボード上での安定感と波に押された時の走り出しを重視するためサイズは大きいものに乗ったほうが上達が早く乗りやすい。

ボードの材質は強度の高いエポキシ樹脂が主体で、中国やタイなどで大量生産したボードが販売の主力となっているが、一部の愛好家向けに著名な職人が一本ずつ丁寧に手作業にて制作するハンドシェイプボードの需要がある。

近年では SUP で釣りをを行う愛好者の増加に伴い、フィッシング用ボードが登場し、それに伴う周辺道具も登場した。

SUPのボードは9フィートを超えるものが多く大きいため、保管場所の確保の問題が発生しており、飛行機のオーバーチャージも高額になりやすい。これらの問題を解決するために、普段は丸めてコンパクトに収納されているが、使用する際に空気をいれて膨らますインフレーターボードも各メーカーから多くのモデル販売が始まった。

パドルに関しては SUP の黎明期においては木製のパドルから始まり、アルミ製、グラスファイバー製、カーボン製が登場した。現在でも木目の雰囲気を楽しむ一部の愛好家は木製のパドルを所有しているが、主力は軽量で強度の強いカーボンパドルとなっている。

図14のグラフはSUPの販売における代表メーカー2社のモデル数の推移を表している。このグラフによると、2009年にはN社は21モデル、S社は16モデルで2社の合計が37モデルであったものが、2014年にはN社が54、S社が100となり、2社の合計が154モデルとなった。SUPの愛好者の人口の増加とともにモデル数も増加していることが確認できた。

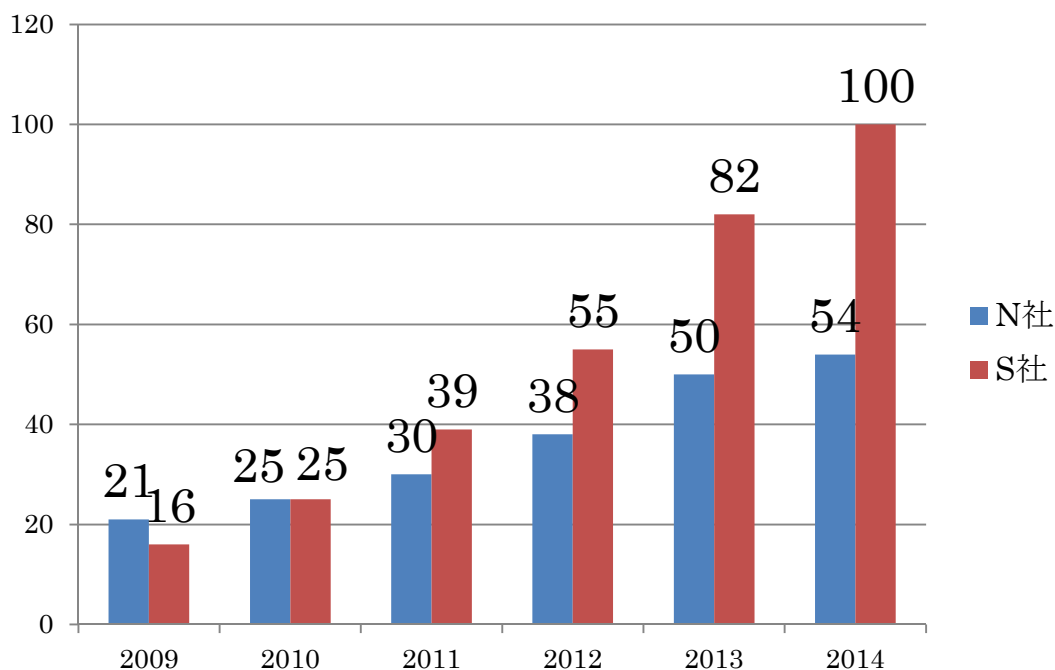


図 14 : SUP の販売における代表メーカー2社のモデル数の推移

続いて、図 15 のグラフは SUP の販売における代表メーカー 2 社のレースボードのモデル数の推移を表している。世界標準である全長が 12' 6' ' 以上のレースボードのモデル数を調査すると、2009 年には N 社、S 社ともに 5 モデルであったものが、2014 年には N 社が 10、S 社が 32 となり、SUP の愛好者の人口の増加とともにレースボードのモデル数も増加していることが確認できた。

その中でも S 社は同じ全長の 12' 6' ' のレースボードであっても、フラットフオーター用や波があるコンディション用や風が強い時のコンディション用などを多様なデザインを販売した。それらのモデルの中でも更にボードの最大幅を細めのタイプから広めのタイプまで何種類か用意し、あらゆる体格、運動能力を持った乗り手のニーズに答えられるよう販売したことがわかった。

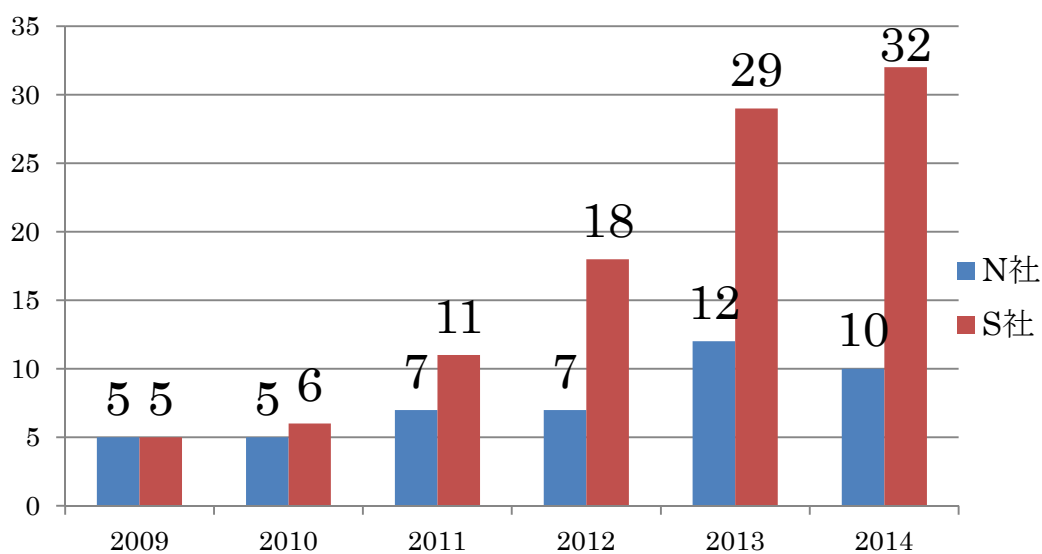


図 15 : レースボードのモデル数の増加

さらに、図 16 のグラフは SUP の販売における代表メーカー 2 社のインフレーターボードのモデル数の推移を表している。インフレーターボードとは、普段は丸めてコンパクトに収納されているが、使用する際に空気を入れて膨らますタイプのボードである（図 17）。2012 年に登場した際は空気が抜けたり、強度が足りないなどあらゆる品質上の問題が発生していたが、S 社が参入した 2013 年頃から品質も上昇し、十分に一般ユーザーのニーズに答えられる商品となった。日本では 2013 年から急激に販売を伸ばしており、日本の大手アウトドアメーカーの C 社と M 社もインフレーターモデルを開発し参入した。

このグラフによると、2012 年には N 社が 2 モデルのみ、S 社に至っては販売していなかったが、2014 年には N 社が 7、S 社が 15 となり、SUP の愛好者の人口の増加とともにインフレーターボードのモデル数も増加していることが確認できた。

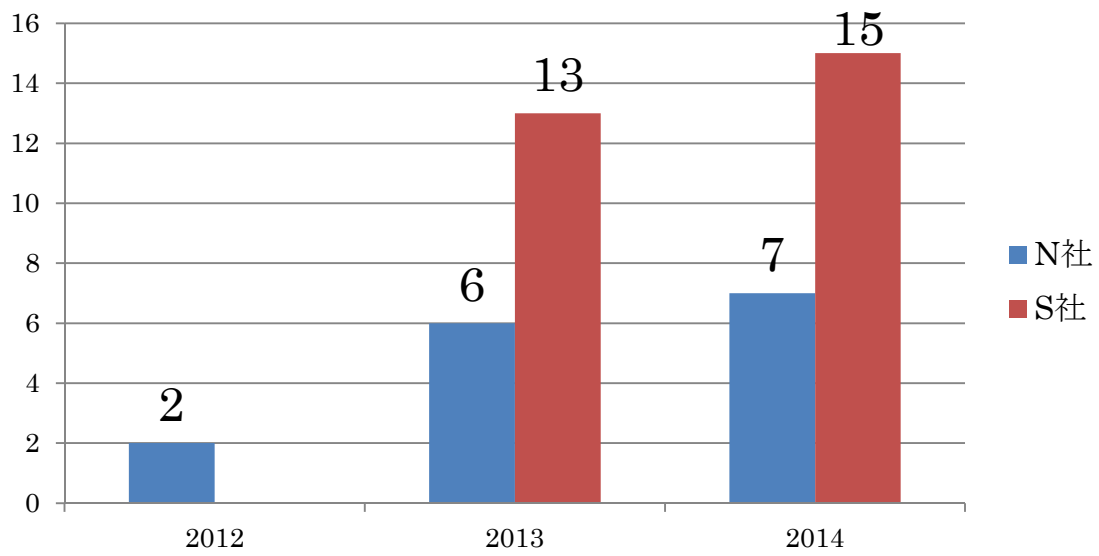


図 16 : インフレーターボードのモデル数の増加



図 17 : インフレーターボードの図説

第4項 世界で開催されたレース数の調査結果

図18のグラフは世界で開催されたSUPのレース数を表している。このグラフによると、2008年に1回しか開催されなかったレースが2013年には136回となり、SUPの愛好者の人口の増加とともにSUPのレース数も増加していることが確認できた。また、すべての年度においてアメリカでの開催が最も多くアメリカが主体となって発展していることが確認できた。

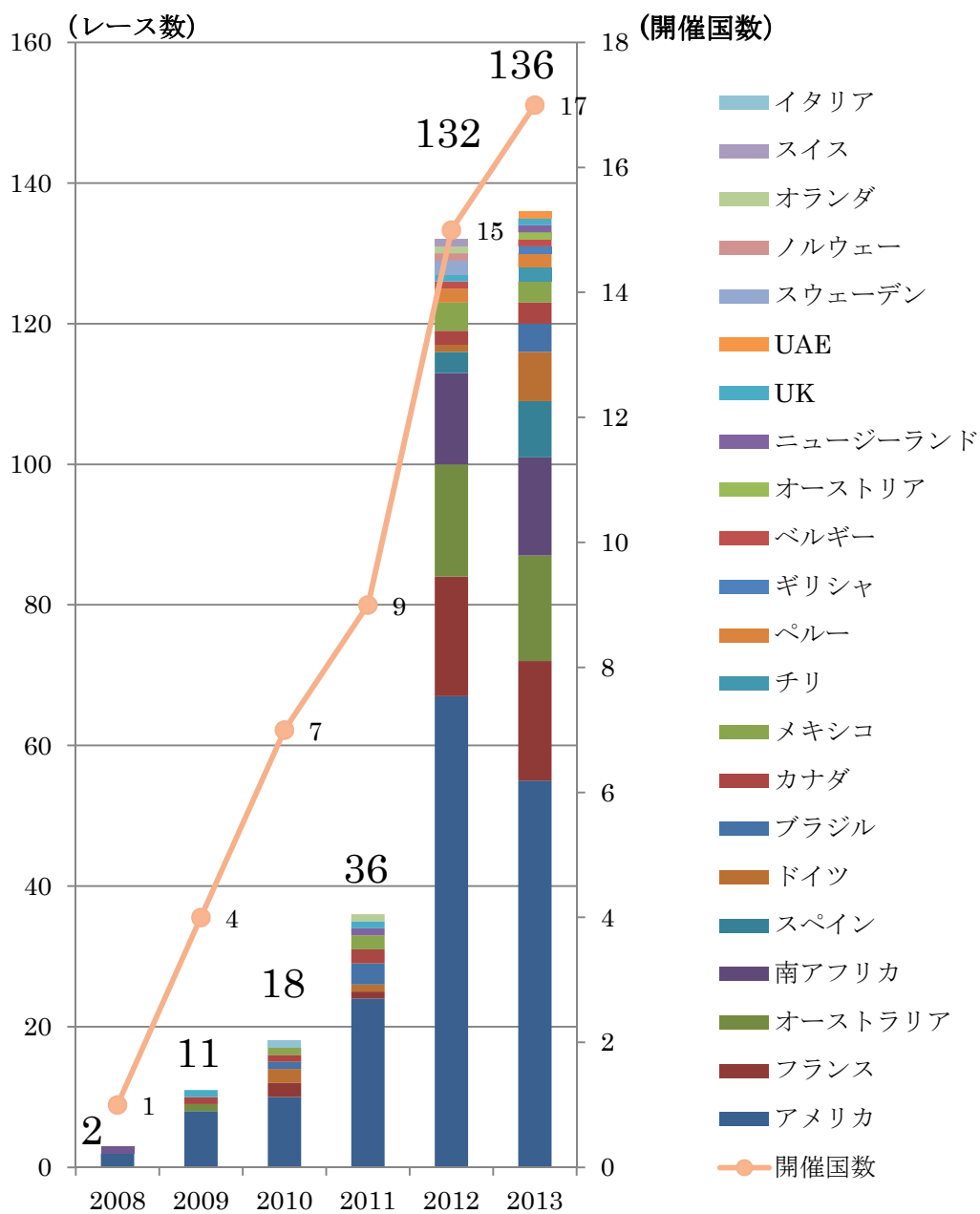


図18：世界で開催されたレース数と開催国数

第5項 世界における代表的な大会の調査結果

表5では、世界における代表的な大会をまとめた。内陸の海に面していないエリアでも湖や川で大会が開催され、多くの参加者を集めていることが確認できた。また、カリフォルニア州のダナポイントで開催される Battle of the Paddle は独特のゆったりとした波があるエリアで行われる大会で、しかも世界で最も権威のある大会であることが確認できた。また、オランダ北部で開催される SUP 11 City Tour は5日間で約220kmを漕ぐ自転車ロードバイクのツールドフランスを参考にしたレースであることがわかった。このレースは世界で唯一の5日間かける長距離ステージレースであり、オランダの大自然を活かしたコース設定がされていることがわかった。更に Stand up World Tour は最高クラスの波がある世界各地を転戦する世界最高峰のウェイブパフォーマンスの大会であることがわかった。

この調査により世界で各地域独特の自然を生かしたあらゆる形式の大会が開催されていることがわかった。

表5：世界における代表的な大会

代用的な大会の名称	概要
Battle of the Paddle	カリフォルニア州のダナポイントで9月下旬に開催される。延参加人数は2012年が1054名、2013年が1190名であり、一度の大会で1000名以上の選手が世界中から集まる世界でも最大規模の大会である。ゆったりとしたレースに最適の波があるエリアで行われるサーフレースとその沖の波がないエリアで行われる10マイルの長距離レースとの二種類を二日間かけて行う。2008年から始まり、2013年において世界で最も権威ある大会としての地位を築いている。
SUP 11 City Tour	オランダ北部の内陸の河川にて9月に開催されるレース競技である。1日あたり最大45kmを漕ぎ、5日間で約220kmを漕ぐ。トップクラスの選手は総合タイムで24時間をきる。自転車ロードバイクのツールドフランスを参考にしたステージレースでありオランダの大自然を活かしたコース設定がされている。Leeuwarden（ルーワルデン）にてスタートし11の市を巡りゴールを目指す。2009年から開催されている。

Molokai 2 Oahu Paddleboard World Championships	ハワイ州のモロカイ島からオアフ島までの約 53km の海峡横断レースである。ボードの上に座って手のひらで漕ぐスタイルのブローンボードとカヌーの大会として 1997 年に始まった。SUP のクラスは 2006 年から追加され、SUP のレースでは最も歴史が古い。7 月下旬ごろ開催される。
Stand up World Series	世界を転戦するレースの大会である。2012 年から始まり、2013 年はアメリカのハワイとカリフォルニアとシカゴ、フランス、スペイン、ブラジル、チリで 9 戦が開催された。
SUP World Cup	ドイツのハンブルグの河川にて 8 月に開催される。短距離のスプリントクラスと長距離のディスタンスクラスがある。
Gorge Paddle Challenge	アメリカの内陸で 8 月に開催される。オレゴンとワシントンの州境をなすコロンビア・ゴージの大河コロンビア・リバーにて開催される。2011 年から開催されており、コースレースとダウンウインドと二種類が開催される。
Hennessey's SUP and Paddleboard Race Series	アメリカ国内を転戦するレースの大会である。2013 年はカリフォルニア州のヘルモサビーチ、ダナポイント、トランスビーチとネバダ州のラスベガス湖で全 4 戦が開催された。2009 年から開催されている。
Paddle Royal San Juan SUP CUP	プエルトリコのサン・フアンで 12 月に開催されるレースでアメリカ本土から多くの参加者を集める。
Stand up World Tour	最高クラスの波がある世界各地を転戦する世界最高峰のウェイブパフォーマンスの大会である。2010 年から始まり、2013 年はアメリカのハワイとカリフォルニア、ブラジル、フランス、UAE で 5 戦が開催された。この大会の年間チャンピオンは SUP のウェイブパフォーマンス競技における世界チャンピオンとして人々から認められる。

第6項 バトルオブザパドルの調査結果

図 19 のグラフはアメリカのカリフォルニアで開催される世界で最も権威のあるレースである Battle of the Paddle (バトルオブザパドル) の参加者数の推移を表しており、Battle of the Paddle の公式ホームページの結果より集計した。参加者数については複数のクラスにエントリーしている選手もいるため、延べ人数となる。

バトルオブザパドルは順調に参加者数が増加しており、第一回開催の 2008 年は延参加者数 269 名であったが、2013 年には延参加者数 1190 名となり、愛好者の人口の増加とともに参加者数も増加していることが確認できた。

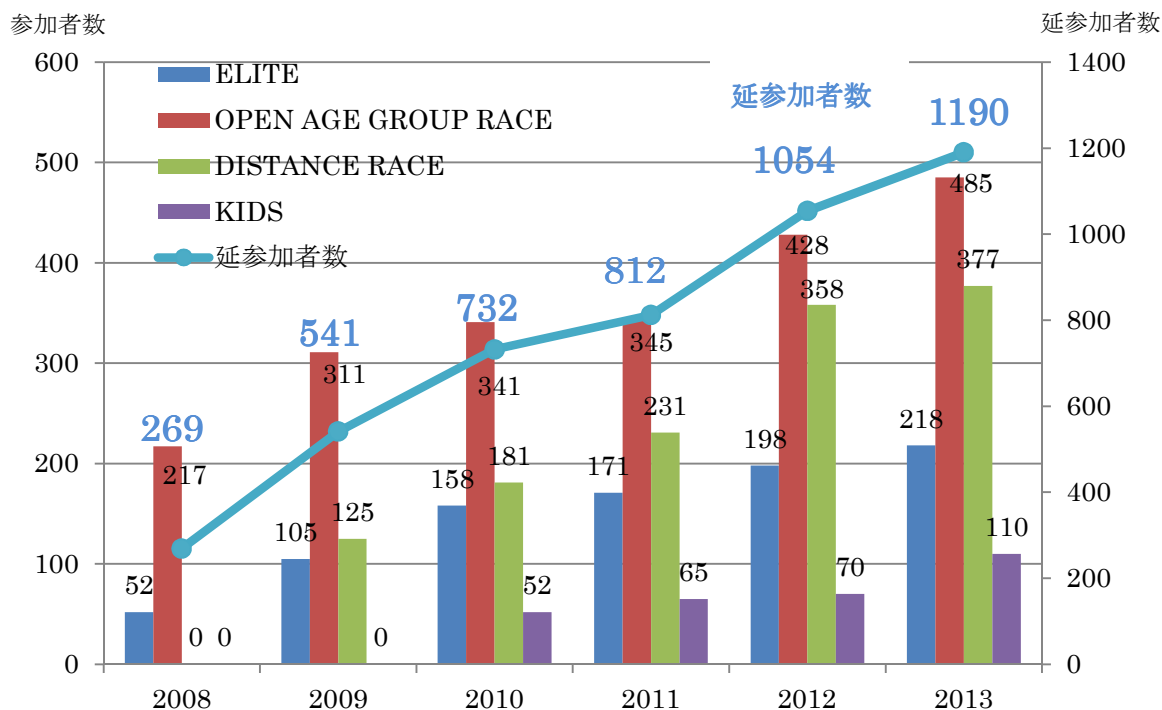


図 19 : Battle of the Paddle カリフォルニア 参加者数の推移

ELITE : 世界トップクラスの選手により競うレース。

OPEN AGE GROUP RACE : 以下の年齢別に順位を決定する一般参加者向けのレース。

15 歳以上 18 歳以下、19 歳以上 29 歳以下、30 歳以上 39 歳以下、40 歳以上 49 歳以下、50 歳以上 59 歳以下、60 歳以上 69 歳以下に分けて行う。

DISTANCE RACE : 長距離のレース、ELITE と OPEN AGE GROUP と同時スタート

10 マイル (1 マイルは 1,852m のため 18km と 520m) のレースである。

KIDS : 14 歳以下の選手を年齢別に分け順位を決定するキッズ向けのレース。8 歳以下、9 歳と 10 歳、11 歳と 12 歳、13 歳と 14 歳に分けて行う。

第7項 SUPの競技スタイルの調査結果

表6では、SUPの競技スタイルをまとめた。海、湖、川、などで、長距離や短距離のレースが行われ、波を利用したレースや波に乗る競技、風を背中から受け風波に乗るレース、激流の川を下る競技など、多種多様な競技スタイルが広がっていることが確認できた。

表6：SUPの競技スタイルの調査

競技スタイル	概要
フラットウォーターレース	波がない海や湖や川で行う。スタートからゴール地点を決め、ゴール時点での順位を競う。波がない場所でも競技が開催可能であるため、アメリカ内陸部の湖（Lake Tahoe など）での大会開催が増えた。
サーフレース	波がある場所で行う。スタートからゴール地点を決め、ゴール時点での順位を競う。波が崩れてくるエリアにブイが設置してあり、そこでの方向転換を強いられる。どのタイミングで波に乗り波から降りるかが非常に重要で高い技術を要求される。コースレースと呼ぶ場合もある。
海峡横断レース	海峡を横断するレース。スタートからゴール地点を決め、ゴール時点での順位を競う。
ダウンウインドレース	スタートからゴール地点を決め、ゴール時点での順位を競う。風を背中から受けて進むコースが設定される。背中からの風向きであるため、風によって発生した波を背後から受けることになり、風波に乗りながら進むことができる。したがってスピードが速くなり、風波に乗った際の独特な感覚が参加者を惹きつけるレース。
スプリントレース	スタートからゴール地点を決め、ゴール時点での順位を競う。200m から 1000m ぐらいの距離で設定される短距離レース。
ステージレース	スタートからゴール地点を決め、ゴール時点での順位を競う数日間かけて行われるレース。

リバーレース	激流を下る。スタートからゴール地点を決め、ゴール時点での順位を競う。岩に衝突しても破損しにくいインフレーターボードを使用するが多い。
ウェイブパフォーマンス競技	波に乗り、波間での技の完成度を競うジャッジによる採点競技である。ヒート制で一つのヒートが8分から20分、2名から6名を同時に採点を行う。得点上位1位から3位ぐらいまでの選手が次のヒートに進むことができる。

第8項 インタビュー調査の結果

インタビュー調査の対象者はほとんどが筆者の経営する会社の取引先であり、長期にわたって親交を深めてきた。したがって2010年から2013年まで何度も現地で会い、メールでのやりとりも複数回に及んだ。3つのインタビュー項目による対象者と研究者1対1の半構造的インタビューを行った。回答から、インタビューの会話のうち発展に関する内容が含まれている部分をコードとして抜き出して、そのコードから発展に関する要素を抽出した。

主なインタビューの内容は表7に示す通りである。

表7：主なインタビューの内容

インタビューの項目
なぜSUPはあなたの居住国において、急激な発展と普及を遂げたと思いますか。
SUPはいつからあなたの居住国において、愛好者が急増したと思いますか。
日本でSUPが普及するには何が大切だと思いますか。

主なインタビューの対象者は表8に示す通りである。

表8：インタビューの対象者

インタビュー対象者名	職業	居住地域
Steve Boehne	ボードメーカー創業者	アメリカ
David Boehne	トッププロ選手	アメリカ
Barett Tester	イベントディレクター	アメリカ

Robin Johnston	トッププロ選手	ハワイ
Kevin Said	トップアマチュア選手	アメリカ
Dale Chapman	ボードメーカー創業者	オーストラリア
Tully ST John	ボードメーカーオーナー	オーストラリア
Peter White	ボードメーカー創業者	オーストラリア

表 9 では、インタビューの会話のうち発展に関する内容が含まれている部分をコードとして抜き出して、そのコードから発展に関する要素を抽出した。

表 9：インタビューの分析と発展への要素の抽出

コード	発展への要素
レース競技に注力したからだと思う。ウェイブパフォーマンスの競技だと波に乗る高い技術も持っていないと参加することが難しく、採点競技であるため観戦者にとってどこでどのような理由で勝敗が分かれたのかわかりにくい。しかもレースのように数百人が参加することが難しい。競技としてのサーフィンはそれらが普及に対しての制約となっている。	競技参加への難易度が低い 競技結果がわかりやすい 一つの大会に同時に参加可能な人数の多い
波がない場所でも楽しめるため危険が少ない、比較的安全だからこそ普及したと思う。	比較的安全である
バトルオブザパドルが始まった時からレース参加者が増えた。以前は SUP はサーフィンの延長線上として楽しめるケースがほとんどであった。	レース競技の増加
レース競技は波の有無によって開催が左右されることがなく、ほぼ確実に成立するためスポンサーもつきやすいから。ウェイブパフォーマンス競技は波がなければ成立しない。	大会開催成立の確立が高い
湖や川など。波がないフラットウォーターでも楽しめるから。サーフィンは波がなければ楽しめない。	あらゆる環境で楽しめる
フラットウォーターで始めるなら簡単に楽しめるから。サーフィンは波に乗れるようになるまで高等な技術を必要とする。	簡単である
日本でレースを普及させるなら全長が短いレース用ボードが必要だ、10' 6' ' ぐらいを標準にすべきだと思う。	道具保管場所の環境
日本でレースを普及させるなら収納が簡単なインフレータブルのレース用ボードを普及させるべきだ。カリフォルニアの人々はほとんどの SUP 愛好者はガレージを所有しており、道具の保管場所に困ることはない。	道具保管場所の環境

日本でレースを普及させたらビーチ際にボード保管用の艇庫が必要だと思う。	道具保管場所の環境
サーフィンやカヌーやウインドサーフィンの愛好者がそれらのスポーツを続けながら SUP との共通性を見出し、興味を持ち、SUP 始めた。そのため愛好者が急増したと思う。	愛好者となる候補者が多い
高いダイエット効果が確認されていてフィットネス効果が高いと思う。	健康志向である
サーフィンよりもレースのような持久系スポーツを好む健康志向の高い客層は、高額なレースボードを購入する層が多い。そのためメーカーの売り上げが大きく伸び、大会開催を支援することが可能になった。	物販の拡大

コードから抽出した発展に関する要素は「競技参加への難易度」、「比較的安全である」、「簡単である」、「競技のわかりやすさ」、「一つの大会に同時に参加可能な人数の多さ」、「レース競技の増加」、「レース競技の増加」、「大会開催成立の確立」、「楽しむための環境の自由度」、「道具保管の環境」、「愛好者となる候補者が多い」、「健康志向である」、「物販の拡大」12 要素が抽出された。(表 10)

表 10：インタビューの整理によって抽出された発展への要素

発展への要素
競技参加への難易度が低い
競技結果がわかりやすい
一つの大会に同時に参加可能な人数が多い
比較的安全である
レース競技の増加
大会開催成立の確立が高い
あらゆる環境で楽しめる
簡単である
道具保管場所の環境
愛好者となる候補者が多い
健康志向である
物販の拡大

第2節 日本における SUP

第1項 日本における SUP の歴史調査の結果

表 11 では、日本における SUP の歴史をまとめた。いくつかのアクションが起きているが、そのほとんどはアメリカの影響を受けて発生したものであり、アメリカが主体となって発展したことが確認できた。

表 11：日本における SUP の歴史

2006 年	国内で初めての SUP によるレースが神奈川県鎌倉市にて開催された。
2007 年 から 2010 年	<ul style="list-style-type: none">・日本の各地域にてボードメーカーやサーフショップ経営者による小さな規模の草レースがいくつか開催された。・カリフォルニアに習ってレースボードの標準が 12' 6' ' になっていった。・カリフォルニアやハワイなどの SUP の道具が続々と日本に輸入されはじめた。
2011 年	<ul style="list-style-type: none">・第 1 回浜名湖 SUP クラシックが開催された。・愛知県で開催される日本最大のロングボードの大会である伊良湖ロングボードクラシックにて初めて SUP クラスが開催された。・浜松大学の宮村司教授、星川秀利准教授、健康プロデュース学部心身マネジメント学科の学生などが中心となり、浜名湖 SUP (SUP) プロジェクトが 2011 年 9 月に始動した。「健康増進」「地域貢献」などを目的として SUP における運動強度の定量化の試みなどの研究を続けている。 <p>また、「浜名湖 SUP マラソン」を 2011 年より開催している。日本の大学においてアメリカの大学のようにレクリエーションの一環として道具を学生に貸出す、または体験会を開催する例は 2013 年 12 月まで見られない。</p>
2012 年	<ul style="list-style-type: none">・空気を入れて膨らますタイプで普段はコンパクトにたためるインフレーターボードが狭い日本の住宅事情にマッチし、日本の市場においてヒット商品となった。
2013 年	<ul style="list-style-type: none">・日本国内で開催された SUP のレースが 20 を超えた

第2項 日本のレース数の調査結果

図 20 のグラフは日本で開催された SUP のレース数を表している。このグラフによると、2008 年に 1 回しか開催されなかったレースが 2013 年には 20 回となり、アメリカと同様に日本においても SUP の愛好者の人口の増加と共に SUP のレース数も増加していることが確認できた。

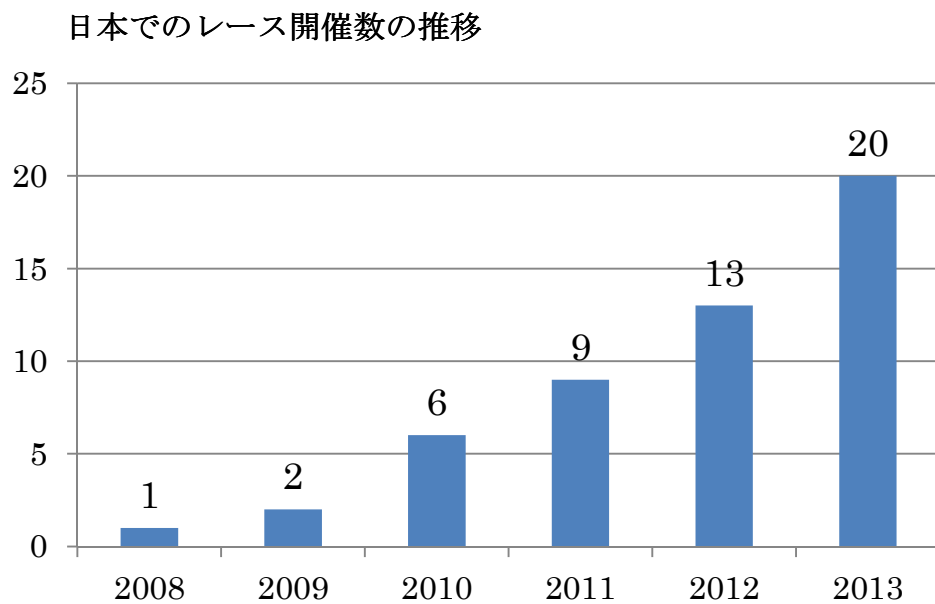


図 20：日本でのレース開催数の推移

第3項 インタビュー調査の結果

インタビュー調査の対象者はほとんどが筆者の経営する会社の取引先であり、長期にわたって親交を深めてきた。したがってメールでのやりとりも複数回に及んだ。3 つのインタビュー項目による対象者と研究者 1 対 1 の半構造的インタビューを行った。回答から、インタビューの会話のうち発展に関する内容が含まれている部分をコードとして抜き出して、そのコードから発展に関する要素を抽出した。主なインタビューの内容は表 12 に示す通りである。

表 12：主なインタビューの内容

インタビューの項目
なぜ日本において SUP は普及していると思いますか。
SUP はいつから何をきっかけに愛好者が増えてきたと思いますか。
SUP が日本において更に普及するには何が大切だと思いますか。

主なインタビューの対象者は表 13 に示す通りである。

表 13：インタビューの対象者

インタビュー対象者名	職業	居住地域
H. M 氏	ボード卸売業者オーナー	神奈川県鎌倉市
Y. T 氏	トッププロ選手	千葉県長生郡
H. I 氏	トッププロ選手	静岡県御前崎市
Y. K 氏	大田観光協会	東京都大田区
Y. T 氏	大田区カヌー協会	東京都大田区

表 14 では、インタビューの会話のうち発展に関する内容が含まれている部分をコードとして抜き出して、そのコードから発展に関する要素を抽出した。

表 14：インタビューの分析と発展への要素の抽出

コード	発展への要素
レースの大会が開催できるからだと思う。サーフィンの大会と違って大勢が参加できるし、特別なスキルも必要ないので気軽に簡単に参加できる。	簡単である 競技参加への難易度が低い 一つの大会に同時に参加可能な人数が多い
波がない場所でも楽しめるから比較的安全である、だからこそ普及したと思う。	比較的安全である
普及に関してなにかきっかけがあったというより、レースの大会の数が少しずつ増えて自然に普及してきたように思う。	レース競技の増加
レース競技は波の有無によって開催が左右されることがなく、ほぼ確実に成立するためスポンサーもつきやすい。ウェイブパフォーマンス競技は波がなければ成立しない。特に湘南は普段波がないため SUP の大会は開催しやすい。	大会開催成立の確率が高い
湖や川など。波がないフラットウォーターでも楽しめるから。サーフィンは波がなければ楽しめない。	あらゆる環境で楽しめる
フラットウォーターで始めるなら簡単に楽しめるから。サーフィンは波に乗れるようになるまで高等な技術を必要とする。	簡単である
日本でレースを普及させるなら収納が簡単なインフレータブルのレース用ボードを普及させるべきだ。狭い日本の住宅事情のニーズに合致しているため 2013 年度はインフレータブルの SUP がとても多く売れた。	道具保管場所の環境
日本でレースを普及させたらビーチ際にボード保管用の艇庫が必要だと思う。	道具保管場所の環境
サーフィンの愛好者は波がない時の楽しみとして、ウインドサーフィンの愛好者は風がない時の楽しみとして、それらのスポーツを続けながら SUP を始めたケースが多い。そのために愛好者が増えたと思う。	愛好者となる候補者が多い
高いダイエット効果が確認されていてフィットネス効果が高いと思う。	健康志向である

コードから抽出した発展に関する要素は、「簡単である」、「競技参加への難易度が低い」、「一つの大会に同時に参加可能な人数の多さ」、「比較的安全である」、「レース競技の増加」、「大会開催成立の確率が高い」、「あらゆる環境で楽しめる」、「簡単である」、「道具保管場所の環境」、「愛好者となる候補者が多い」、「健康志向である」、の 11 要素が抽出された。(表 15)

表 15：インタビューの整理によって抽出された発展への要素

発展への要素
簡単である
競技参加への難易度が低い
一つの大会に同時に参加可能な人数が多い
比較的安全である
レース競技の増加
大会開催成立の確率が高い
あらゆる環境で楽しめる
簡単である
道具保管場所の環境
愛好者となる候補者が多い
健康志向である

第 4 項 三重県熊野市における大会開催に関する調査結果

・三重県熊野市における大会開催に関する調査結果

1) ケーススタディ

表 16 は三重県熊野市にて SUP のインストラクター向け体験会が開催され、2014 年の国際大会開催が決定するまでの過程分析を実施しまとめたものである。それぞれの出来事について、関係者がいつどのような動きを行ったのかを整理し示した。

新たな大会の開催が決定するには、まず主催者側に積極的な担当者があり、トップが開催に前向きなことが重要である。そして主催者側の担当者と何度も面談し、かつコミュニケーションを円滑に継続することが重要であることが確認できた。

表 16：三重県熊野市にて国際大会開催が決定するまでのプロセス

<p>2012年12月11日 初めてのコンタクト</p>	<p>電話にて筆者宛てに、三重県熊野市役所 観光スポーツ交流課 スポーツ交流係 北裏和樹氏より SUP 体験会を開催するにあたっての問い合わせがきた。</p>
<p>2013年5月15日 三重県熊野市にて SUP の体験会を開催する日程を決定</p>	<p>北裏和樹氏と何度かの電話とメールのやり取りを交わしたのちに SUP の体験会を開催する日程を決定した。その際に市長にインタビューを実施することも決定した。</p>
<p>2013年6月21日 市長にインタビューを実施</p>	<p>三重県熊野市 市長である河上敢二氏を表敬訪問し、インタビューを実施した。</p>
<p>2013年6月22日 インストラクター向けに体験会を開催</p>	<p>三重県熊野市の新鹿海水浴場にて SUP スクール開催した。新鹿海水浴場は日本の海水浴場 88 選に選ばれている美しい砂浜、素晴らしい透明度の海であった。天気良くコンディション良好、台風の影響で内海である新鹿海水浴場においてもわずかなうねりが入っていた。</p> <p>2013年6月22日に三重県熊野市の新鹿海水浴場にて、筆者が講師を務める SUP の体験会を開催した。当日の受講者は、今後新鹿海水浴場における SUP のインストラクターとなる方々である熊野マリンスポーツ推進委員会委員 7 名と熊野市役所職員 3 名の合計 10 名であった。筆者はボードに乗り漕ぐための基本的な技術、安全上注意しなければならない点や、危険回避の技術、そして楽しむための考え方などを指導した。受講者全員にとっても好評であった。</p>
<p>2013年10月20日 一般市民向けの SUP 体験会を開催</p>	<p>三重県熊野市の新鹿海水浴場にてシーカヤックの大会と同時開催で一般市民向けの SUP 体験会を開催した。しかし、当日の新鹿海水浴場はひどい悪天候のために体験会を実施することが困難であり中止となった。</p>
<p>2013年12月 国際大会の開催が決定</p>	<p>熊野市長へ国際大会開催のための予算案を提出し、翌年の国際大会の開催が決定した。</p>

2) インタビュー

三重県熊野市市役所の関係者へのインタビュー

2013年6月21日に三重県熊野市市長の河上敢二氏に表敬訪問を実施した際、市長と関係者に対してインタビューを行った。その翌日、2013年6月22日に三重県熊野市の新鹿海水浴場にて、筆者が講師を務めるSUPの体験会を開催した。体験会開催後にもインタビューを実施した。そして以下は体験会受講前と受講後のインタビュー内容の要約である。

三重県熊野市の関係者とは共同でSUPの体験会を開催したため、確認事項が多くメールと電話でのやりとりも複数回に及んだ。3つのインタビュー項目による対象者と研究者1対1の半構造的インタビューを行い、回答からインタビューの会話のうち発展に関する内容が含まれている部分をコードとして抜き出して、そのコードから発展に関する要素を抽出した。

2013年6月21日 SUPの体験会受講前のインタビュー

主なインタビューの内容は表17に示す通りである。

表 17：主なインタビューの内容

インタビューの項目
なぜSUPを町興しに活用しようと考えましたか。
新鹿海水浴場において、すでに開催しているシーカヤックの大会についてお聞かせください。
SUPが熊野市において更に普及するには何が大切だと思いますか。

主なインタビューの対象者は表18に示す通りである。

表 18：インタビューの対象者

インタビュー対象者名	職業	居住地域
河上敢二氏	三重県熊野市役所 市長	三重県熊野市
濱口幸治	三重県熊野市役所 観光スポーツ交流課 課長	三重県熊野市
北畑亨氏	三重県熊野市役所 観光スポーツ交流課 スポーツ交流係長	三重県熊野市
北裏和樹氏	三重県熊野市役所 観光スポーツ交流課 スポーツ交流係	三重県熊野市

下岡竜也氏	三重県熊野市役所 観光スポーツ交流課 スポーツ交流係	三重県熊野市
前川隆史氏	熊野市教育委員会熊野市紀和 B&G 海洋センター アドバンスド・インストラクター	三重県熊野市
池田宣政氏	熊野マリンスポーツ推進委員会 会長	三重県熊野市

表 19 では、インタビューの会話のうち発展に関する内容が含まれている部分をコードとして抜き出して、そのコードから発展に関する要素を抽出した。

表 19：インタビューの分析と発展への要素の抽出

コード	発展への要素
SUP の記事を新聞で見て、このスポーツは可能性があるかと判断し、市長がスポーツ交流課の職員に SUP を新鹿海水浴場で普及させるよう指示をした。	町興しの戦略
熊野市は平成 16 年 7 月に世界遺産に登録された「熊野古道」をはじめ、三百有余年の歴史を持つ「熊野大花火大会」、日本の棚田百選にも選ばれた丸山千枚田など、歴史に育まれた文化的資源や吉野熊野国立公園を背景とした海、山、川の豊かな自然に恵まれたまちである。観光名所として人々から愛されているが、それら以外にも楯ヶ崎や鬼ヶ城などのリアス式海岸と日本の水浴場 88 選に選ばれた新鹿海水浴場、美しい砂利浜が続く七里御浜海岸などの多様な熊野の「海」があり、もっと観光客の皆様を知っていただきたいと考えていた。	町興しの戦略
波がない場所でも楽しめるため危険が少なく比較的安全で、しかも簡単だと思った。	比較的安全である 簡単である
三重県熊野市において SUP の大会を開催することは町おこしとして非常に重要なポイントである。2013 年末には尾鷲熊野インターが開通し、名古屋から車で 3 時間以内で来れるようになる。	交通の便の向上
新鹿海水浴場において、開催を継続しているシーカヤックの大会はシーカヤックマラソンという。ご好評をいただいております。2013 年で三回目を迎えた。この大会と一緒に SUP の大会を開催したらどうだろうか。	大会（レース）の開催

熊野市で普及させるために熊野市民に対して SUP の体験会を開催したい。レンタルも開催し、海水浴場に來られた誰もが気軽に楽しめるようにしたい。そのためのインストラクターの教育にも注力していきたい。	体験会の開催 インストラクターの養成
熊野市の新鹿海水浴場の 2012 年度來場者は 2 万 1000 人であり 2000 年の 5 万 2000 人と比較して大幅に減ってしまった。SUP を体験会などを通じて普及させ誘客の起爆剤にしたい。	町興しの戦略
熊野マリンスポーツ推進委員会はマリンスポーツを通じて熊野の海を PR しようと愛好者で立ち上げた。これまでにシーカヤックや一人乗り小型ヨットの普及に取り組んできたが SUP が最も道具が小さく普及しそうだ。	シーカヤックや一人乗り小型ヨットより道具が小さい

コードから抽出した発展に関する要素は、「町興しの戦略」、「比較的安全である」、「簡単である」、「交通の便の向上」、「大会（レース）の開催」、「体験会の開催」、「インストラクターの養成」、「シーカヤックや一人乗り小型ヨットより道具が小さい」、の 8 要素が抽出された。（表 20）

表 20：インタビューの整理によって抽出された発展への要素

発展への要素
町興しの戦略
比較的安全である
簡単である
交通の便の向上
大会（レース）の開催
体験会の開催
インストラクターの養成
シーカヤックや一人乗り小型ヨットより道具が小さい

2013年6月22日 SUPの体験会受講後のインタビュー

主なインタビューの内容は表 21 に示す通りである。

表 21：主なインタビューの内容

インタビューの項目
SUP を体験した感想をお聞かせください。
新鹿海水浴場において、すでに開催しているシーカヤックの大会との同時開催は可能だと思いますか？
SUP が熊野市において更に普及するには何が大切だと思いますか。

主なインタビューの対象者は表 22 に示す通りである。

表 22：インタビューの対象者

インタビュー対象者名	職業	居住地域
河上敢二氏	三重県熊野市役所 市長	三重県熊野市
濱口幸治	三重県熊野市役所 観光スポーツ交流課 課長	三重県熊野市
北畑亨氏	三重県熊野市役所 観光スポーツ交流課 スポーツ交流係長	三重県熊野市
北裏和樹氏	三重県熊野市役所 観光スポーツ交流課 スポーツ交流係	三重県熊野市
下岡竜也氏	三重県熊野市役所 観光スポーツ交流課 スポーツ交流係	三重県熊野市
前川隆史氏	熊野市教育委員会熊野市紀和B&G 海洋センター アドバンスド・インストラクター	三重県熊野市
池田宣政氏	熊野マリンスポーツ推進委員会 会長	三重県熊野市

表 23 では、インタビューの会話のうち発展に関する内容が含まれている部分をコードとして抜き出して、そのコードから発展に関する要素を抽出した。

表 23：インタビューの分析と発展への要素の抽出

コード	発展への要素
パドルさばきが難しかったが、慣れれば簡単。誰でも乗れる魅力がある。熊野マリンスポーツ推進委員のスタッフがもう少し練習して皆に広めていきたい。	簡単である インストラクターの養成
シーカヤックや一人乗り小型ヨットに比べたらSUPが最も道具が小さく普及させやすいだろう。	シーカヤックや一人乗り小型ヨットより道具が小さい
ボードに安定性があるので初めてでも楽しめる。	簡単である
波がない場所でも楽しめるため危険が少ない、比較的安全だからこそ普及したと思う。	比較的安全である
簡単だから家族で楽しめそうだ。	簡単である
今後熊野市で更に普及させるために新鹿海水浴場の地元の小学生に対して SUP の体験会を開催したい。2013年からSUPのレンタルと体験会を開催し、海水浴場に来られた誰もが気軽に楽しめるようにしたい。そのためのインストラクターの教育にも注力していきたい。	体験会の開催 インストラクターの養成
普及のために新鹿海水浴場で既に開催しているシーカヤックの大会と同時にSUPの大会を開催することができると思う。	大会（レース）の開催
このスポーツは熊野の豊かな自然を活かせる。	町興しの戦略
吉野熊野国立公園の瀨峡をクルージングするツアーを企画しても面白いと思う。	名所でのクルージングツアー開催

コードから抽出した発展に関する要素は、「簡単である」、「インストラクターの養成」、「シーカヤックや一人乗り小型ヨットより道具が小さい」、「比較的安全である」、「体験会の開催」、「大会（レース）の開催」、「町興しの戦略」、「名所でのクルージングツアー開催」、の8要素が抽出された。（表 24）

表 24：インタビューの整理によって抽出された発展への要素

発展への要素
簡単である
インストラクターの養成
シーカヤックや一人乗り小型ヨットより道具が小さい
比較的安全である
体験会の開催
大会（レース）の開催
町興しの戦略
名所でのクルージングツアー開催

3) アンケート調査

2014年10月にSUPの国際大会を熊野市の新鹿海水浴場で開催するにあたり、地域の小学生に対して、新鹿海水浴場とマリンスポーツに対する意識をアンケートにより調査した。表25はそのアンケート調査の概要を示す。

表 25：アンケート調査の概要

調査目的	1. マリンスポーツに対する関心度について 2. 開催地である新鹿海水浴場について
調査対象	新鹿小学校の4年生から6年生の生徒
標本数	有効回収標本数 n=20 回収率 100%
調査時期	2013年12月3日
調査方法	集合調査法

回答者の学年は4年生が7名で5年生が5名で6年生が8名であった。回答者の男女比は男の子13名、女の子7名という結果であった。サーフィンを知っていますかという質問に対して、知っていると答えた回答者は19名で知らないと答えた回答者は1名であった。SUPを知っていますかという質問に対して、知っていると答えた回答者は5名で知らないと答えた回答者は15名であった。海が好きですかという質問に対して好きと答えた海が好きと答えた回答者は14名で、嫌いとおらず、どちらでもないと答えた回答者は6名であった。海でスポーツをやりたいですかという質問に対して、やみたいと答えた回答者は9名でやりたくないと答えた回答者は6名で、どちらでもないと答えた回答者は5名であった。回答者が住んでいる地域や熊野市全体で、お祭りや運動会など、いろいろな行事がありますが、それらに参加していますかという質問に対しては、ほとんど参加していると答えた回答者は7名で、参加していないと答えた回答者は1名で、時々

参加していると答えた回答者は12名であった。大人になった時も熊野市の新鹿海水浴場で遊びたいと思いますかという質問に対して、遊びたいと答えた回答者は19名で、遊びたくないと答えた回答者はおらず、1名が無回答であった。

小学生は自分たちが大人になる未来において、新鹿海水浴場がきれいで海水浴が可能で、大勢の観光客が来て賑わう場所であることを望んでいることが確認できた。

図 21 は新鹿海水浴場で良いところは何ですか？という質問に対する回答である。

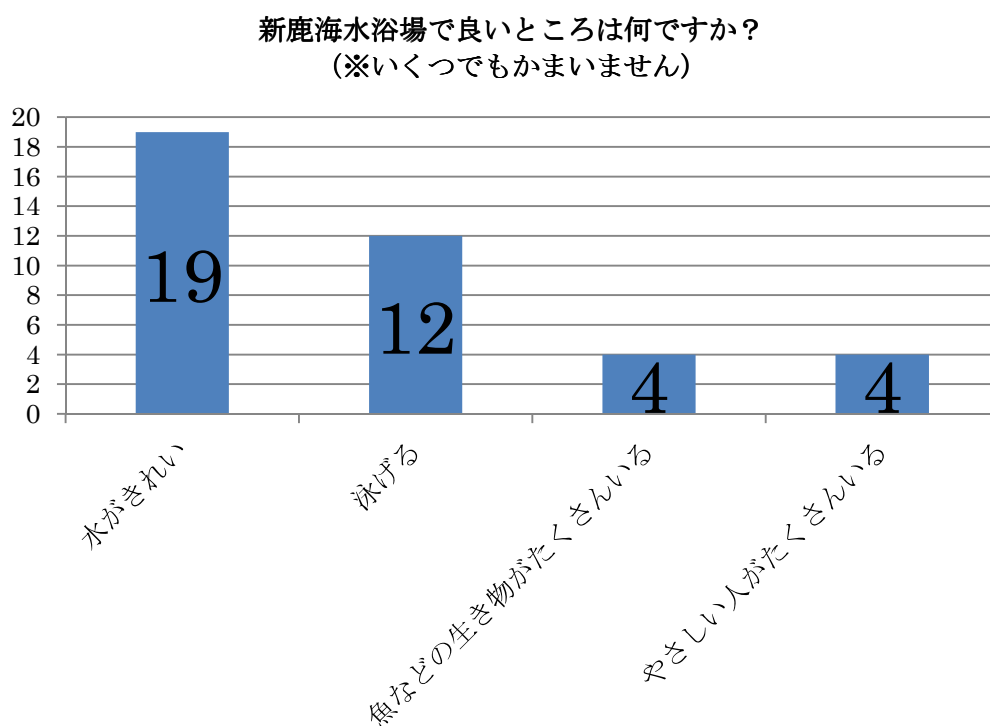


図 21：新鹿海水浴場で良いところは何ですか？

図 22 は新鹿海水浴場で嫌だと思うところは何ですか？という質問に対する回答である。

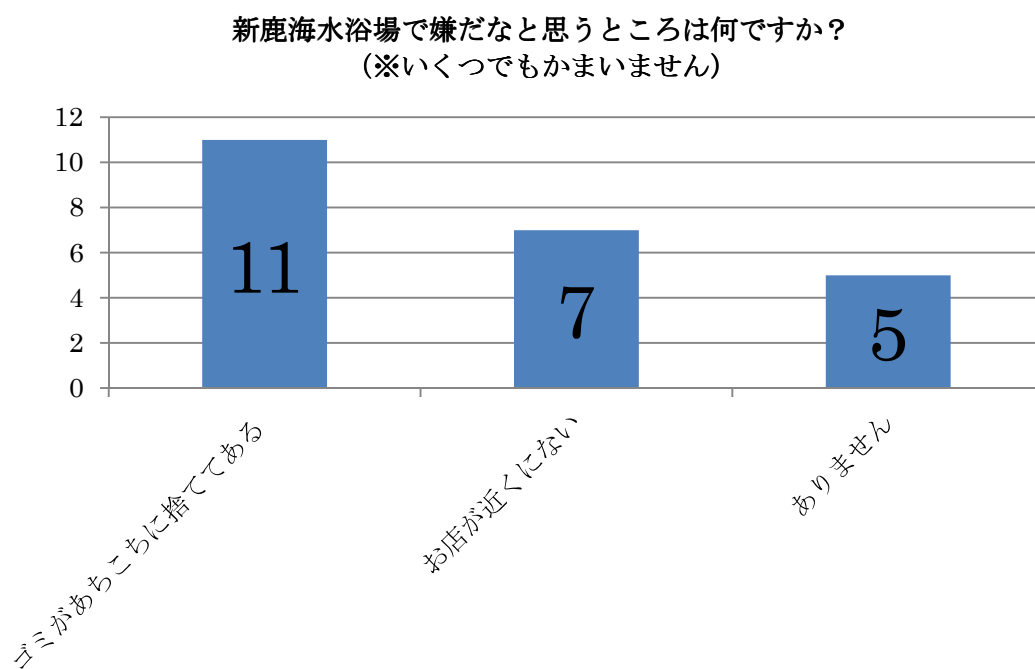


図 22：新鹿海水浴場で嫌だと思うところは何ですか？

図 23 は大人になった時、熊野市の新鹿海水浴場がどんな海水浴場になっていたら良いと思いますか？という質問に対する回答である。

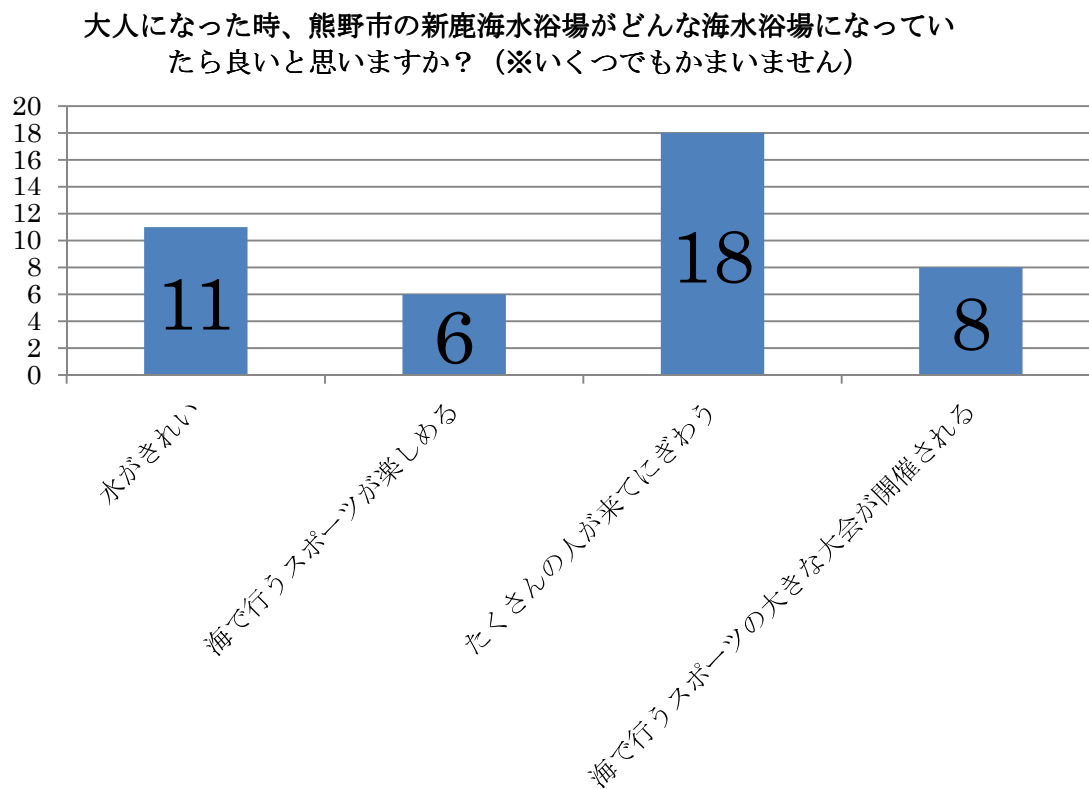


図 23：大人になった時、熊野市の新鹿海水浴場がどんな海水浴場になっていたら良いと思いますか？

第4章 考察

第1節 SUPの発展と普及についての考察

第1項 アメリカにおけるSUPの発展と普及についての考察

アメリカにおけるSUPはレース競技に注力し、簡単で比較的安全なスポーツであったからこそ急激な発展を遂げたと考えられる。普及と同時に市場も拡大し、SUPの代表的なメーカーが多種多様なデザインのボードを販売するに至った。アメリカにおいては今後も世界における普及をリードしていくと思われる。代表的なメーカーはほとんどがアメリカのメーカーであり、市場もアメリカが最も大きい。日本におけるSUPの発展と普及を考えると、やはりアメリカと同じくレース競技に注力すべきであろう。

レース競技はフラットウォーターであれば特別な技術や経験が必要なく、誰でも簡単に参加可能であるし、カヌーやマラソンやロードバイクの大会のように数百人が同時に参加することが可能だからである。一方、SUPの競技の一つであるウェイブパフォーマンスを例に挙げると、波に乗るといった高い技術も持っていないと参加することが難しく、採点競技であるため観戦者にとってどこでどのような理由で勝敗が分かれたのかわかりにくい。SUPはカヌーのように、波がなくても漕いで進むことができるため、レースという競技が成り立ち、波の有無によって開催決定が左右されることはない。そのため、ほぼ確実に大会が成立するというメリットがあり、企業側にとっては大会へのスポンサードへのリスクが低いと言える。このような理由から、アメリカでは、多くの大会主催者はウェイブパフォーマンス競技ではなく、フラットウォーターを中心としたレース競技に注力するようになっていったと推察される。特に2008年にカリフォルニアで第一回のバトルオブザパドルが開催されてからはアメリカのSUPシーンは急速にレース競技に傾倒していった。その結果、現在SUPはアメリカ全土において、マラソンやロードバイクのような健康に良い持久系のスポーツとして定着している。

また、フラットウォーターでSUPを行えば、波がある場所で行うサーフィンよりも、遥かに簡単かつ比較的安全であるため愛好者が増えたと考えられる。

さらに、同時に多くの人が参加できること、結果と順位がわかりやすいレースの開催回数が増えることは、競技の発展と普及に効果的であることが示唆された。

第2項 日本におけるSUPの発展と普及についての考察

SUPは海、湖、川などで楽しむことができ、アメリカにおいては穏やかなフラットウォーターで楽しむ人が最も多かった。そのため、フラットウォーターで楽しむことを目的とし

た道具の販売に注力していき、フラットウォーターで行う体験会、大会を多く開催していくことで、日本においても SUP の愛好者を増やせる可能性があると思われる。

さらに、アメリカにおいて SUP をしている人はサーフィンをしている場合が多いが、ジムでのトレーニング、ハイキング、ランニングなども同時に継続している人が多い。したがって、日本においても、ジムでのトレーニング、ハイキング、ランニングなどに高い関心を持つ層へのマーケティング活動を重視していくことが SUP の普及策の一つであると考察できる。

一方で、国土の広いアメリカでは多くの戸建てにガレージがあり、ボードの保管を容易に行うことが可能であるが、土地の面積が狭い日本国内の住宅事情においては「ボードの保管」という問題が浮かび上がる。日本国内にて SUP を普及させていくためにはグレンデの近くに十分な保管場所を確保することが必要であり、コンパクトに収納できるインフレーターボードの販売に注力していくことが重要であると考えられる。しかし、現在のインフレーターボード品質状況を鑑みると、登場した当初と比べ飛躍的な品質向上が見られるものの、やはりゴムボードの延長線上からは脱却できず、空気が入っているボード特有の乗った際の剛性の弱さを感じる。このインフレーターボードの剛性が更に上がり、品質を向上させることができれば、日本における「ボードの保管」に関する問題の解決に繋げることができると言える。

筆者はこれまで様々な場所で SUP の体験会を通じて、このスポーツの素晴らしさ楽しさを広め普及活動に従事してきた。SUP というスポーツはフラットウォーターにて始めれば、誰でも楽しめる簡単なスポーツであり、日本におけるメジャースポーツである野球やサッカーなどに勝るとも劣らない魅力があると考えられる。特に家族で一緒に簡単に楽しめる面は素晴らしく親子の絆を育むにも良い役割を果たすと言えるであろう。

この素晴らしい魅力を伝えるためにも一貫した理念を掲げ、町興しと絡めた普及活動を実施し継続していくことによって地域の方々に愛されるスポーツになることが必要である。

第3項 三重県熊野市における大会開催についての考察

三重県熊野市での体験会開催や国際大会の開催など、地方自治体と一緒に大会と体験会を開催し、継続することが重要である。こうした地域に根ざした活動を実施していくことが市場を育て普及を促すことに繋がっていくと考える。

三重県熊野市にて、2014年の国際大会の開催が決定したように、新たな大会の開催が決定するには、主催者側に積極的な担当者があり、トップが開催に前向きなことが重要であるため、そういった方々にアピールを続け、コミュニケーションを円滑に継続していかなければならない。

また、国際大会開催に絡めて選手と関係者以外の観光客を世界から誘致する戦略が必要だ。地域で指導するインストラクターの養成も必須であり、ボードの保管場所も必要であ

る。

第1節 三重県熊野市での国際大会開催からさらなる発展に向けて

第1項 日本の大会が世界の模範となるために

三重県熊野市の新鹿小学校の生徒に対してのアンケートを通じて明らかになったことであるが、生徒は自分たちが大人になる未来において、新鹿海水浴場がきれいで海水浴が可能で、大勢の観光客が来て賑わう活気のある場所であることを強く望んでいる。

2014年にレースの大会を開催する際には、集客と大会の成功に万全を期すのはもちろんのこと、ビーチクリーンにも一層の配慮をし、海を綺麗にし続ける文化を育んでいかなければならないと思う。

一方で、国際大会開催には選手と関係者以外の観光客を世界から誘致する戦略も必要であろう。そして熊野古道を代表とする観光名所、地域特有の伝統工芸や料理をアピールしていかなければならない。そして日本人特有の心遣いの行き渡った大会にしたい。これらを継続し続けることで世界各地からの参加者は増え続け、日本の大会が世界の模範になっていくであろうと考える。

新たな国際大会の開催は異国間の相互理解を促進し、国際平和に大きく貢献するものと思われる。そして、スポーツビジネスに関する学術研究分野においても、地域における国際大会継続の成果がいかに町興しに繋がるかの研究領域の発展につながればと考えている。

第2項 レースは欧米の文化から世界の文化へ

国際大会を日本で開催し継続することで、SUPのレースが欧米のものから世界的な文化になることが期待される。現在では世界17ヶ国以上でSUPの大会が開催されている。アメリカ、オーストラリア、フランス、ブラジル、南アフリカが多くの大会を開催しており代表格である。そして日本でも大会が増えてきており、三重県の熊野市でも開催される。開催国が増えていき、日本でも開催が増えていけば、SUPのレースはその競技参加への壁が低い優位性から、マリンスポーツの代表格として、欧米の文化から世界の文化へと昇華していくであろうと考える。

第3項 日本におけるSUPの発展と普及のために求められること

SUPはアメリカのカリフォルニアを中心として発展し、全米各地に普及していった。日本においても町興しをしたいと強い願望を持つ地方自治体と共同でレースを開催することが普及への足掛かりになるのではないかと考える。地方自治体と一緒に大会と体験会

を開催し継続することが重要である。継続には地域で指導するインストラクターの養成も必須であり、ボードの保管場所も必要である。一方で、国際大会開催には選手と関係者以外の観光客を世界から誘致する戦略も必要であろう。

また、日本において世界に通用する選手を育成することが求められる。筆者は2010年から頻繁に世界の競技に参戦してきた。世界でトップクラスの選手を多く輩出しているオーストラリアではSUPというマイナーな競技でさえも選手の育成とトレーニング理論が確立されており、素晴らしい実績を残している。日本の選手も世界で戦うという意思を持ち、そのための明確な目標設定と練習環境の整備をし、それを実現できる環境を作らなければ、勝利を得ることは難しい。そのため日本の大会であっても世界選手権に向けて大会の開催を行うことが重要であると考えられる。2014年の熊野市の大会では筆者が長年友好を深めてきた世界選手権に出場している選手たちを招待し、日本の選手たちに世界のレベルを感じてもらおうと考えている。そしていつか日本から世界選手権で勝利する選手を誕生させたい。

第2節 研究の限界と課題

本研究には2つの限界がある。

まず、本研究はアメリカにおけるSUPの発展と普及にほぼ特化した内容である。したがって、他の国での発展と普及については更なる検討が必要である。

2つめは国際大会開催までの過程分析は三重県熊野市という限定された地域での実施であることが挙げられる。そのため日本国内の他の地域では更なる検討が必要である。

第5章 結論

アメリカにおける SUP はレース競技に注力したからこそ急激な発展を遂げたということが明らかとなった。

日本においても普及のためにレースに注力し、簡単で比較的安全なスポーツであることをアピールすることが発展につながると思われる。また、このスポーツの素晴らしい魅力を伝えるためにも、地方自治体と協力し、大会や体験会の開催などの普及活動を継続し、町興しと絡めた普及活動を実施し継続していくことによって、地域の方々に愛されるスポーツになることが必要である。こうした活動の継続が、日本における SUP の発展と普及を促していくと考える。

本研究を通じて、SUP の発展を考えた時に、地方自治体が果たす役割は大きいと感じた。まず地方自治体の関係者に町興しを成功させるという強い情熱がなければならない。次に地方自治体とインストラクターと企業と地域住民といった様々な関係者と理念の共有が大切であると感じた。そして全員にメリットがなければならない。地方自治体は、SUP を通じて町興しを実現し、地域の経済発展を促すという大きな使命がある。インストラクターは SUP 体験者に安心して楽しんでもらうという役割がある。企業は自治体とインストラクターをサポートし SUP の普及を促すという使命がある。地域住民は SUP を通じて余暇を楽しみ健康増進を図る。これら4者に対して全員にメリットがあることを常に探究し続け、互いにどのような方策で4者の利益を最大化できるかを考え続けることで SUP の文化は更なる発展を遂げていくと思う。

今後 SUP を日本で普及させていくためには、地方自治体との協力体制を強化することが非常に重要である。そして SUP 特有の比較的安全に楽しめるメリットと、簡単に楽しめるメリットを更に検証し、科学的根拠を元にアピールし、複数の大企業からスポンサーを得られるようにしたい。そのためには、筆者のような SUP の業界にいる者が、是が非でも国際大会開催を継続し、その地域での大会開催と普及活動が地域活性化に結びつくかを結果でもって証明していかなければならない。

最後に、今後の日本における SUP の発展と普及へ向けた施策を導き、論を閉じた。本研究が微力ながらも SUP の発展と普及に貢献できれば幸いである。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、指導教員である早稲田大学大学院教授 平田竹男先生には様々な面においてご指導をいただき、研究活動を支えていただきました。平田先生の温かくも厳しいご指導がなければこの論文を完成させることはできませんでした。このような貴重な機会を与えてくださいましたことに心から深く感謝いたしております。同様に貴重な助言を頂戴いたしました副査の中村好男教授、児玉有子先生にも深く感謝を申し上げます。また、平田研究室同期の皆様にも事あるごとにご協力をいただきました。素晴らしい先生方や、各スポーツ界のリーダーとなって活躍されている大学院の仲間の皆様から、多くの刺激をいただくことが出来、皆様に深く感謝しております。

また、本研究に理解を示しインタビュー調査、アンケート調査に多大なるご協力をしていただきました三重県熊野市市役所の皆様、インタビューへ協力していただき、貴重なアドバイスを送ってくださったカリフォルニアのインフィニティサーフボードのステューブボーン氏、この研究に関わっていただいた全ての皆様に深く感謝の意を申し上げます。また、厳しい大学院生活と会社経営という多忙な日々の中で心身ともに支えてくれた妻と娘、息子にも心から感謝の気持ちを送ります。本文中に登場させていただきました先輩諸氏方々の敬称を省略させていただいた非礼をお詫びさせていただきます。

最後になりますが、本研究を行うにあたり、非常に多くの方々のお力添えや、ご協力、励ましのお言葉を頂戴いたしました。関わってくださった全ての皆様に心からの感謝の意を申し上げるとともに、今後の皆様のご健康とご多幸を祈念いたしまして、本稿を締めくらせていただきます。

参考文献

- 1) 参考 URL 浜松大学 <http://www.hamamatsu-u.ac.jp/news/20110927/index.html>
- 2) 石井英一『ビーチスポーツの定着に関する研究 ～辻堂ビーチクラブの事業計画書～』, 2008 年
- 3) 鷺見全弘『わが国におけるオープンウォータースイミング(OWS)の成長発展に関する研究』, 2008 年
- 4) 佐藤真海『各国の取り組み事例を踏まえたパラリンピック発展モデルに関する研究』, 2011 年
- 5) Steve West; STAND UP PADDLE A Paddlers Guide, KANU CULTURE, 2012
- 6) STANDUP JOURNAL, 2009-2013
- 7) STANDUPPADDLE MAGAZINE, 2009-2013
- 8) SUP MAGAZINE, 2012-2013
- 9) RACE GUIDE, 2012
- 10) SUPracer <http://www.supracer.com>
- 11) STANDUP JOURNAL <http://standupjournal.com/>
- 12) STANDUPPADDLE MAGAZINE <http://www.standuppaddlemagazine.com/>
- 13) SUP MAGAZINE <http://www.supthemag.com/>
- 14) BATTLE OF THE PADDLE <http://www.battleofthepaddle.com/>
- 15) WPA (WORLD PADDLE ASSOCIATION) <http://worldpaddleassociation.com/>

初心者でも海上散歩

熊野マリンスポーツ推進委員会(池田宣政会長)は22日、熊野市の新鹿海水浴場で委員7人を対象にスタンドアップパドルサーフィン講習会を開催した。スタンドアップパドルサーフィンとは大きなサーフボードに立ち、パドルを使ってかじりを取



池田宣政会長

立ち、パドルを使ってかじりを取
りながら海上を進むマリンス
ポーツ。講習会は、新鹿海水浴
場の魅力を向上させるための、
現在のシーカヤック、一人乗り
小型ヨットに続くアイテム作り
が目的。講師にプロ選手の河合
辰巳さんを招き、元ビーチバ
レー選手で日本ビーチ文化振興
協会の朝日健太郎理事長も同行
した。



河合辰巳プロがパドル操作を指導=22日、熊野市の新鹿海水浴場

スタンドアップパドルサーフィン 熊野市で講習会

河合講師が「絶対大丈夫」と太鼓判を押したとおり、全員が立ち上がった波の上で海上散歩を楽しんだ。

河合講師は「波が静かで湾になっていいるから、ボードが太平洋まで流されることはない。素晴らしい環境だ」と海水浴場の環境を褒め、「パドルサーフィンのボードは安定性があるので、初めてでも楽しめる」と話し、家族でも遊べるスポーツと強調した。

池田会長は「パドルさきはきが難しかったが、誰でも乗れる魅力がある。スタッフがもう少し練習して、みんなに広めたい」と述べた。

このスポーツは、2005年頃から国内でも注目され、人気もつき上り。現在1万人の愛好者がいるという。同海水浴場は昨年2万1000人の来場者で、00年の5万2000人と比較して半減。市では誘客の起爆剤にしようと、講習会など通じて普及を図る考え。

(更田敏明)



海上散歩を楽しむ講習参加者



社 会 部 0597-89-4323
吉 野 市 本 部 0597-89-4323
熊 野 市 本 部 0597-89-4323
熊 野 市 本 部 0597-89-4323
熊 野 市 本 部 0597-89-4323
熊 野 市 本 部 0597-89-4323
熊 野 市 本 部 0597-89-4323
熊 野 市 本 部 0597-89-4323

毎月14日は感謝デー
居酒屋 かつぱ
（夕方5時30分から夜11時まで営業）
熊野市本町南詰町 0597-89-3515

新鹿の海は最適

マリンスポーツ推進委 SUPサーフィン講習



【挨拶する池田会長】

熊野マリンスポーツ会長では、海を利用して、日頃熊野市の新鹿海岸を、これまでにスタンスアップパドルサーフィンやSUP(スタンドアップパドル)の普及を行い、会員らが新たなマリンスポーツの魅力に手触るを感じていた。同会はマリンスポーツをとおして熊野の海をPRしようとする。愛好者らで組織。これまでパドルサーフィンやSUPの普及に取り組み、おき、今回新たにスタンドアップパドルサーフィンの導入を図った。これは大きなサーフボードの上に立ち、オール(パドル)を使って漕ぐウオーターズポーツ。講師に数々の大会で優勝を収めている、愛知県河合辰巳さんを招いた。



【河合さん（手前）が乗り方を指導】



【新鹿の海を悠々と進む朝日さん】



【まるで海上を歩くような参加者】

ろには絶対に行かないことを呼びかけていた。この後、参加者は次々に海へと入った。ボードが大きいので安定しており、すぐに立って乗りこなす人も派から見ると、まるで人が海の上に乗っているように不思議な光景が広がっていた。また、この日は河合さんの友人で日本ビーチ文化振興協会理事長、男子健太郎さんも訪問し、スタンスアップパドルサーフィンと新鹿の海を講義していた。市では同サーフィンのボードを5艇購入し、観光協会などと協議し、新鹿海水浴場での貸し出しを検討しているという。

新市場建設など節目

熊野漁協一丸となり取組む

熊野漁協山下専組 合長は21日、熊野市遊魚市場は、市の全面的な管理型を即売所の開設や、奈良のJASショップと

を販売する試みも実施予定。これは仲買人ではなく、組合員が外に出で売っていく新たな取組となる。経営環境は厳しさを増し、魚類の向上が執行部に与えられた。一番重要な課題。漁業資源の保護、

す段階になると、皆様の協力が不可欠。変わらぬご協力をと、挨拶。議事では昨年度の事業決算報告に続き、今年度の事業計画を審議。漁業資源の保護、

開花



熊野市 日久生屋町

新たな体験メニュー好感触

スタンドアップパドルサーフィン 貸し出しも検討

海を利用した体験メニューづくりにとりくんでいる熊野マリンスポーツ推進委員会（池田宣政会長）は22日、熊野市新鹿町の新鹿海岸でスタンドアップパドルサーフィンの指導者講習会を開いた。会員らは体験を通じて、熊野の豊かな自然を生かした新たなマリンスポーツの魅力に手こたえを感じていた。

同会はマリンスポーツなどを通じ熊野の海をPRしようと、愛好者らで組織。これまでにシーカヤックやOP（オフチャミスト）ヨットの普及に取り組んでおり、今回、新

たに同サーフィンの導入を図った。これは、大きなサーフボードの上に立ち、オードルを使って漕（こ）いで波に乗るスポーツ。講師として数々の大会で優勝経験があり、愛知県豊田市でサーフショップを営む河合辰巳さんと、元パレーホルオリンピックピクチャー選手で現日本ビーチ文化振興協会理事長の朝日健太郎さんを招いた。

講習会には、会員と市職員など約10人が参加。はじめに河合さんが漕ぎ方や立ち方などを丁寧に指導。波に対してボードの後は絶対に行かない



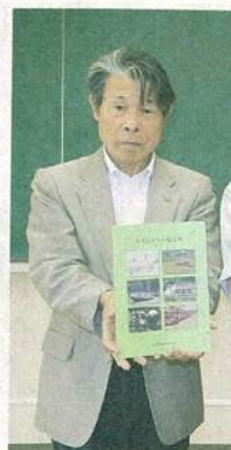
スタンドアップパドルサーフィンに挑戦する参加者

ことなど安全に楽しむためのアドバイスも行った。この後、参加者は実際に海に入り、同サーフィンを体験。はじめはボードの上立つだけでも苦労していたが、時間がたつにつれ乗りこなしていた。市では、ボードを5本購入しており、今後、新鹿観光協会などと協議し、新鹿海水浴場での貸し出しを検討しているほか、一般向けに体験会なども企画しているという。

保護者

コミュニ

県立紀南高校太校長が、平成21年度、23年度本年度も県教育らコミュニテイ、ルの指定を受け期間は2年間。コミュニテイとは、保護者、民などから構成、校運営協議会を、学校・保護者、恵を出し合い、支え、支えていく「地、にある学校づく、めていく取り組み、指定を受けたら、19日夜、同、一ハウスで第1、営協議会が開か



でき上がった冊（左から）

にぎやかに「お買い物を楽しんだ。物やお金の価値・役割を理解すること



「いらっしゃいま



立ち漕ぎサーフを体験

新鹿海水浴 元バレー朝日さんも挑戦



河合さん指導のもとパドルサーフィンのコツを教わる委員

ボード上に立ち、パドルと呼ばれる櫂(かい)をこいで進む「スタンドアップパドル」の体験会が二十三日、熊野市新鹿町の新鹿海水浴場で開かれた。



新鹿海水浴場でうまく波に乗り

同海水浴場の魅力向上を目的に各種マリンスポーツを推進する熊野マリンスポーツ推進委員会(池田直政会

長)が企画。委員七人が参加した。スタンドアップパドル・サーフィンは、ハワイ生まれの新しい水上スポーツ。サーフボードの上に立ったまま乗り、オールを使ってパドルするもので、ウォータースポーツの一つ。浮力があるため、ロングボードで乗れないような波にも乗れ、波がないときもボードに乗ってパドルするカヌー感覚も楽しめるという。



朝日さんも新鹿の海をボードで満喫

と交流がある元バレーボールオリンピック代表で元プロビーチバレーボール選手の朝日健太郎さんも訪れた。河合さんはあいさつで「普段は波がないのでパドル・サーフィンに適している」と同海水浴場の印象を語り、パドルなどの操作方法を指導した。

と入った。河合さんによると、このスポーツは初心者でも簡単に操作できることが魅力で、委員らもわずか数分で立ったままオールを漕ぎ、パドル・サーフィンを満喫していた。

東紀州地域振興公社(理事長・河上政二熊

野市長)とみえ熊野の子コンテナ

最優秀賞は

みえ熊野の情景ス

市ではパドル・サーフ購入して貸出も進んでいる。電話番号：南紀 TEL:049-422-1111 FAX:049-422-1112

新鹿小学校 4 年～ 6 年生の皆さま

2014 年の新鹿海水浴場での SUP サーフィン体験会の開催にあたり、参考とさせていただきますので、アンケート調査にご協力をお願いいたします。問 1 から問 15 の質問のあてはまるところに○印をつけてください。また、() の中には自由な意見を書いてください。

問 1 : あなたは、何年生ですか？

- ・ 4 年生
- ・ 5 年生
- ・ 6 年生

問 2 : あなたは、男の子ですか？女の子ですか？

- ・ 男の子
- ・ 女の子

問 3 : サーフィンをしていますか？

- ・ 知っている
- ・ 知らない

問 4 : SUP サーフィンを知っていますか？

- ・ 知っている
- ・ 知らない

問 5 : 海が好きですか？

- ・ 好き
- ・ 嫌い
- ・ どちらでもない

問 6 : 海でスポーツをやってみたいですか？

- ・ やってみたい
- ・ やりたくない
- ・ どちらでもない

問 7 : 問 6 で答えた理由を書いてください。

()

問 8 : みなさんが住んでいる地域や熊野市全体で、お祭りや運動会など、いろいろな行事がありますが、それらに参加していますか？

- ・ ほとんど参加している
- ・ ときどき参加している
- ・ 参加していない

問 9 : 熊野市の新鹿海水浴場を良いところにするために、あなたが協力するとすれば、どんなことをしたいと思いますか？

()

問 1 0 : 新鹿海水浴場で良いところは何ですか？ (※いくつでもかまいません)

・水がきれい ・魚などの生き物がたくさんいる ・やさしい人がたくさんいる ・泳げる ・ありません ・その他 ()

問 1 1 : 新鹿海水浴場で嫌だなと思うところは何ですか？ (※いくつでもかまいません)

・お店が近くにない ・ゴミがあちこちに捨ててある ・ありません

・その他 ()

問 1 2 : 大人になった時、熊野市の新鹿海水浴場がどんな海水浴場になったら良いと思いますか？ (※いくつでもかまいません)

・水がきれい ・海で行うスポーツが楽しめる ・たくさんの方が来てにぎわう ・海で行うスポーツの大きな大会が開催される

問 1 3 : 大人になった時も、熊野市の新鹿海水浴場で遊びたいと思いますか？

・遊びたい ・遊びたくない

問 1 4 : 問 1 3 で答えた理由を書いてください。

()

問 1 5 : 将来の熊野市の新鹿海水浴場について何でも良いから自由に書いてください。 ()

これで終わりです。ご協力ありがとうございました。

■早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 トップスポーツマネジメントコース
河合辰巳 (プロ SUP サーファー)

■熊野市観光スポーツ交流課 スポーツ交流係